

43049

教科書文庫

4
230
51-1910
20000 89902

Kodak Gray Scale



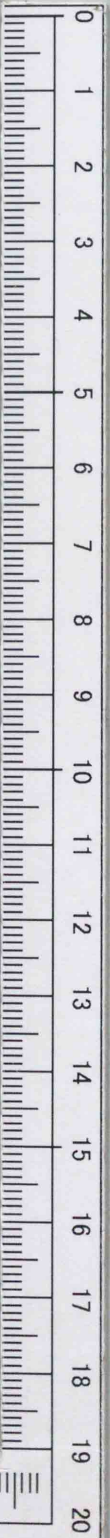
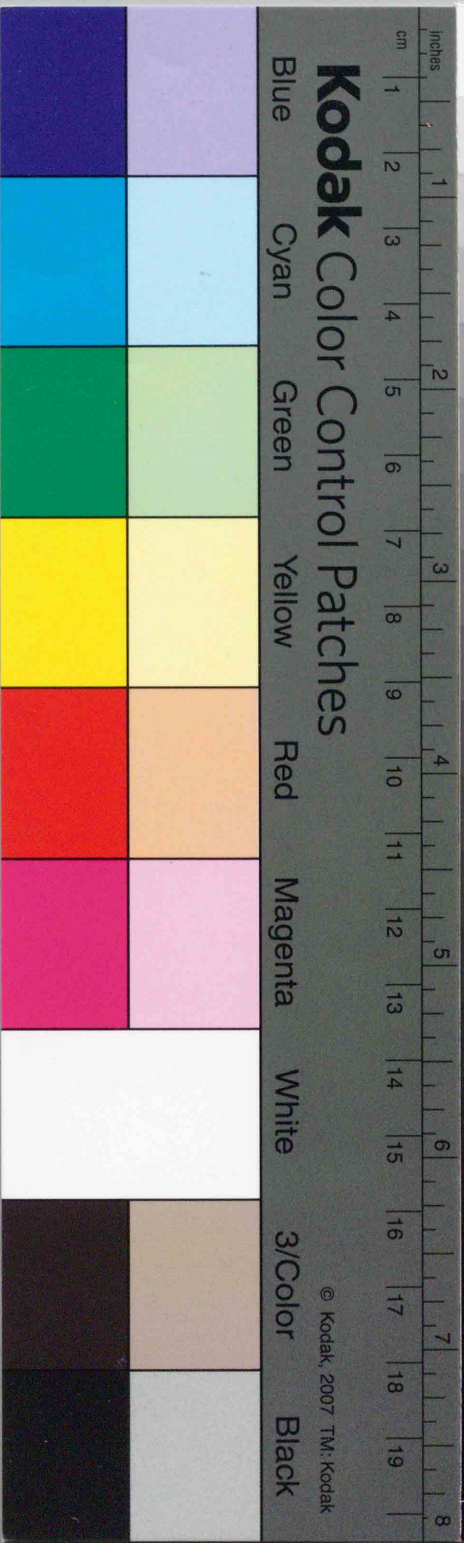
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

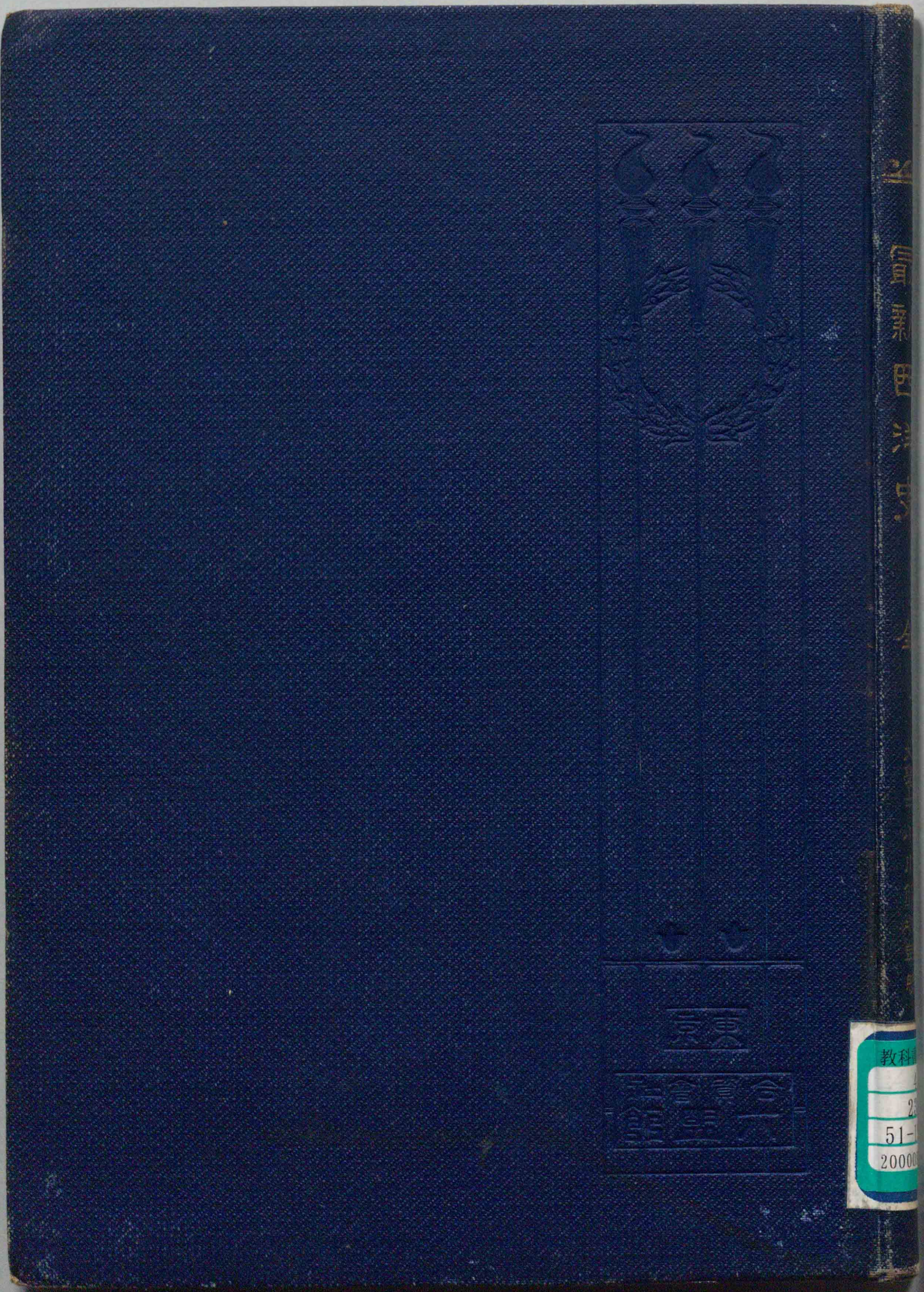
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



京都府立総合資料館  
蔵書番号

教科書  
2  
51-  
20000



資料室

教科書文庫  
4  
230  
51-1910  
2000089902

4C  
230  
明45

明治四十四年七月四日  
文部省檢定

文學士小川銀次郎著

# 最新西洋史

東京

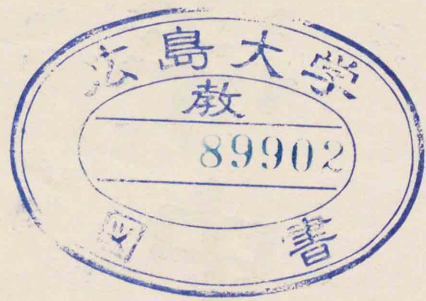
合資  
會社  
六盟館藏版

広島大学図書

2000089902



Faint ghosting of the book's title and author information on the reverse side of the cover.



### 例言

- 一 本書は師範學校講習科・實業學校及同程度の學校に於る西洋歴史教科書に充るの目的を以て編纂せり。
- 一 本書所載の事項は、成るべく學藝及實業の發展に關するものを採り、また他學科との連絡にも注意せり。
- 一 事實の本邦または東洋に專屬すべきものは、成るべく國史または東洋史に譲りて本書にはこれを略述し、唯事實の連絡を示すに止めたり。
- 一 外國固有名詞は成るべく假名を用ひ、その發音は率ね文部省取調委員の發表せるものによれり。
- 一 書中の年號は凡て西洋紀元を用ひて國史・東洋史と對照の便を計り、なほ諸處に歷代年號等をも記入しおきたり。

一 繪畫は讀者の記憶を助くるを以て諸所適宜に之を挿入せり。  
一 帝王の系圖は各要處にこれを挿入し、固有名詞は本書所載の  
分のみとして繁雜を避けたり。  
一 卷末に年代對照表を附し、また諸所に地圖を附して研究參照  
に便せり。

明治四十二年十二月

編者識

# 最新西洋史目次

## 第一部 与古期

第一篇 上古東方諸國興亡時代……………	一
第一章 えじふと ふえはきあへぶらい……………	一
第二章 あつしりあとべるしあ……………	四
第二篇 ざりしあとべるしあの競争時代……………	六
第一章 ざりしあとべるしあとの争 ざりしあの文明……………	六
第二章 アレクサンドル大王……………	三
第三篇 ろーま大統一時代……………	五
第一章 ろーまの外國征討……………	五
第二章 ろーまの内紛及び統一……………	八

第三章 ろーまの文物 キリスト教……………二〇

第二部 中古期

第一篇 キリスト教國と異教國との競争時代……………二四

第一章 ろーま帝國の消長……………二四

第二章 さらけん國……………二六

第三章 列國の創立……………二六

第二篇 法王權隆盛時代……………三二

第一章 ろーま法王の雄勢 十字軍……………三二

第二章 西よーろぱの制度國情……………三四

第三篇 法王權衰頽時代……………三六

第一章 法王の失權 文運の復興……………三六

第二章 封建武士の失權 火器の發明……………四〇

第三章 オスマンリトルコの勃興 新陸地發見……………四一

第三部 近古期

第一篇 政教上紛争の時代……………四六

第一章 宗教改革……………四六

第二章 いすばにあ王フィリポ二世と……………四九

第三章 いざりす女王エリザベタ……………四九

第四章 三十年戦争……………五三

第五章 いざりす革命……………五四

第二篇 強國の勃興時代……………五七

第一章 ふらんすの全盛……………五七

第二章 ろしあの勃興……………六一

第三章 ぶろしあの勃興……………六四

第四章 ーろつぱ諸國殖民の形勢……………六七

合衆國の獨立……………六七

第四部 近世期

第一篇 よーろっばの大亂時代……………七一

第一章 ふらんす革命……………七一

第二章 ナポレオンの偉業……………七四

第三章 ナポレオンの衰亡 平和克復……………七六

第二篇 保守專制時代……………七九

第一章 神聖同盟の成立……………八〇

第二章 神聖同盟の破綻 ざりしあの獨立……………八一

第三篇 自由確立の時代……………八二

第一章 七月革命とその影響……………八二

第二章 二月革命とその影響……………八四

第四篇 統一成功の時代……………八五

第一章 ナポレオン三世 くりむ戦争……………八五

第二章 いたりあの統一……………八七

第三章 あめりか合衆國……………八九

第四章 どいつの統一……………九〇

第五篇 最新の形勢……………九三

第一章 ろしあをとることの役……………九三

三國同盟・二國聯合……………九三

第二章 最近の文明……………九七

第三章 西洋諸國の勢力擴張……………九九

第四章 明治三十七八年の戦役……………一〇二

附録

年表……………一一六

# 最新西洋史 目次終

## 最新西洋史

文學士 小川銀次郎著

### 第一部 上古期

#### 第一篇 上古東方諸國の興亡時代

##### 第一章 えじふと ふえにきあ

へふらい

えじふと起る種姓  
 支那の開明と殆ど同時にあふりか洲にえじふと國起れり。  
 土人はいんどの如く種姓の別を立て王教師EGYPT武士AFRICA商工INDIA牧畜者等その業務を世襲せり。就中教師は祭祀を掌り學術を究めしかば、天文・數學・醫術等著しく進歩し、ヒーログリHEROGRYPH

上古期 上古東方諸國の興亡時代 えじふと



産業



フリグロ - ヒ

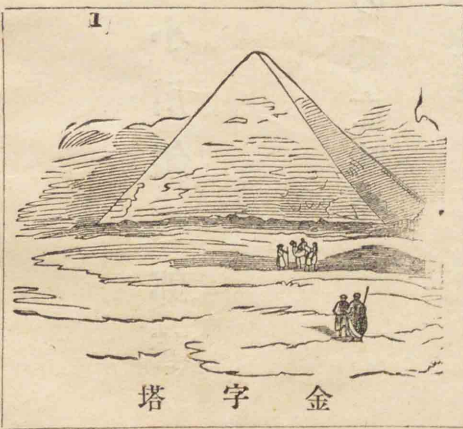
フ等の文字を用ゐて、パピロスPAPIROSに記録するの法も發明せり。

この地は氣候暖にして、地味豊なりしかば、小麥・麻・椰子等よく繁殖し、人民はただ種を蒔き實を刈れば足るの有様なりしかば、衣食を得ること甚易く、紡織冶金の術發達し、

その麥織物等は盛に海外に輸出せられたり。

建築

えじぶと人は建築に長じ、よく雄大宏壯なる建物を造れり。に  
1る河邊に屹立せる金字塔は國Nile王の墓丘にして巨石を以て構造せられ、高さ五十丈に達せるもの



金字塔

Gizeh 金字塔の最大は底が111間四方高さ71間其の北にあり  
出塔の30アリレリ外國に取られ今ハ別最大のローマにテレン152尺

えじぶとに  
入る種族

ふえにきあ  
の工藝貿易

文字  
へぶらいの  
一神教

ありといふ。その附近にある方尖塔等の如き、また人目を驚かすに足る。

この國は、西紀前十七世紀の中頃最も隆なりしが、この際  
に、**あじあ西部のふえにきあへぶらい**人等の入り込むもの多

Phoenicia, Hebrews, Chetnal

かりき。

A	B	G	D	E
ろ	ー	ま	字	
ぎ	り	し	あ	新
ぎ	り	し	あ	新
ふ	え	に	き	あ
ふ	え	に	き	あ

ふえにきあ人は地中海の東岸に住し、船を作りて航海、貿易、殖民に従事し、織物、染料、玻璃の工藝品を齎らして、えじぶとの小麥等と交易し、なほ進みて地中海、太西

洋の沿岸に運搬貿易し、また音標文字を發明して交通に利せり。この音標文字は後世西洋文字の基なり。  
へぶらい人は一神教を奉ずる民なり。近傍の他教徒に迫害せられ、一時難をえじぶとに避けしが、その後ち酋長モ

王政

分裂

あつしりあ  
の一統

あつしりあ  
の滅亡

西紀六〇六年  
(神武の朝  
東周時代)

あつしりあ  
の隆盛

モーゼを戴きてえじふとを逃れ、遂にばれすちなPalistineの故地に復へり、神慮を受けて政を執れり。その後ち外國の侵略盛なるに及び、王を置きてこれに當りしが、西紀前九五三年に至り、遂にいすらIsraelえるとゆだやJudeaとに分裂せり。

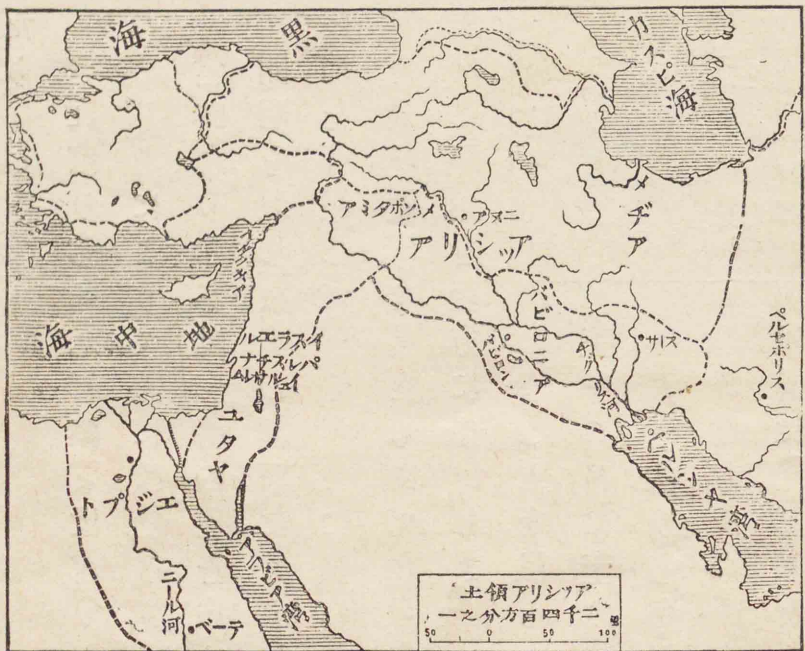
### 第二章 あつしりあとべるしあ

この頃ちぐりす河邊にあつしりあ起り、漸くふえはきあ、いすらえるを滅ぼし、ゆだやえじふとを降し、西紀前第七世紀の中頃には天下統一の大業を成せり。

あつしりあは、にぬあに都し國運甚盛なりしが、統御の法宜しきを得ざりしかば、西紀前六〇六年に至りめぢあ及びびろBabyloniaにあの叛亂にあひて國覆りぬ。

ここに於て舊王國は皆獨立せしが、就中ばびろBabyloniaにあ最も

四國對立



隆盛を致し、運河を通じて疏水に便し、交通に利せり。されば農業も發達して麥、椰子、棗等の食料品最も豊富を致せり。天文學、建築術もまた著しく進み、刺繡、毛氈、陶器の製造も頗る精巧を極む。これ等の製造品は舟車の便により、東は印度より西は地中海沿岸に輸出せられ

ざりしあの  
勃興

べるしあの  
統一

たり。

さればりぢあえじふとは、ざりしあの兵を雇ひ、めぢあは  
べるしあによりて僅にばびろにあに對立するを得たり。

當時ざりしあは形勝の地を占め、夙に東方の文化を學び

て開明を致し、數多の邦國に分立して相競ひ、ふえにざあの殖

民地を征服して漸く西方に強し。殊にすばるたは武斷勇

猛を尙び質素を旨とし、あてねは、自由民權を愛し商工業を

重んじ、頭角を西方に見はしき。

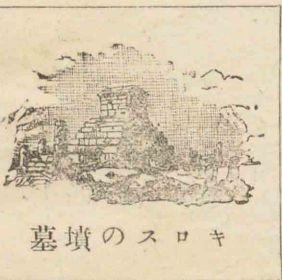
べるしあはもと、めぢあの屬領なりしが、

王キロスCyrusに至りめぢあに叛きてこれを滅

ぼし、漸次りぢあはびろにあを降し、ばくと

りあ地方をも平定し、王カンビセスCambysesの時に

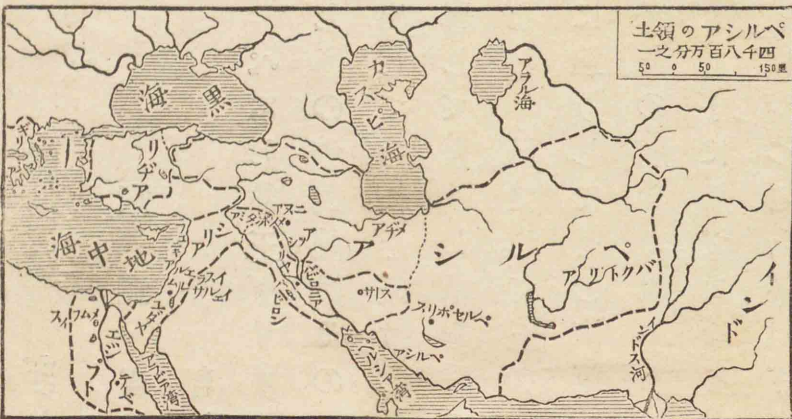
は遂にえじふとを滅ぼして、天下統一の大



墓墳のソロキ

西紀前五二五  
年(安寧の朝  
孔子時代)

べるしあの  
宗教



土領のアシルペ  
一之分万百八千四  
50 0 50 150里

業を成せり。時に西紀前五二五  
年なり。

べるしあは郡縣の制を立てて

大國を統治し、ザラツストラZarathustraの説

けりと傳へられたる二元神教を

奉ぜり。この教は善惡禍福を以

て光明闇黒二種の神の争鬪勝敗

の結果によると説けり。唐の世

支那に傳はれる祇教ジ即ち是れな

り。その後拜火教カも行はれたり。

ペルシアと  
ギリシアと  
衝突の因

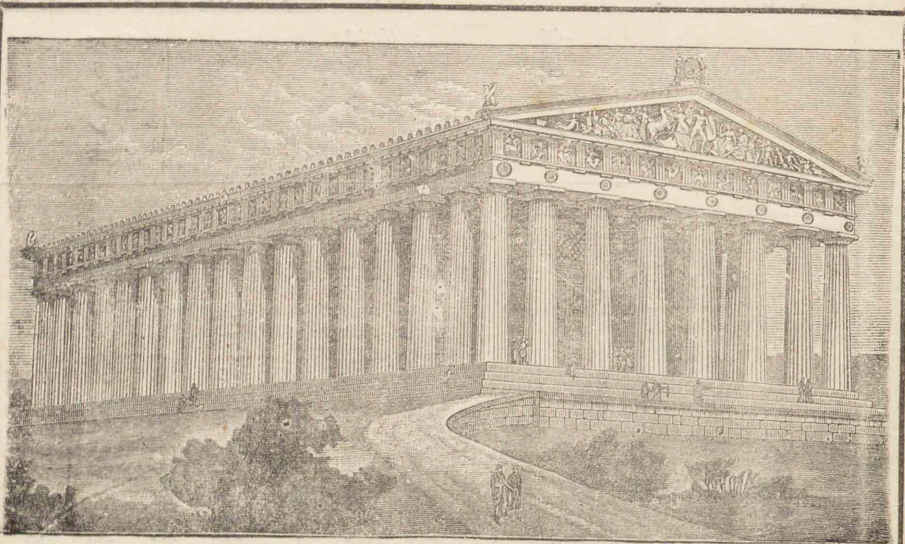
西紀前四八〇年  
(蘇徳の朝  
孔子歿前)  
さらみすの  
海戦  
敗るしあ大

## 第二篇 ぎりしあとペルシアの競争時代

### 第一章 ぎりしあとペルシアの争

#### ぎりしあの文明

ペルシア王ダリオスDariusが小あじあを征服するに及び、ぎりしあの殖民地はその壓抑に堪えずして叛す。あてね兵を出してこれを援けしかば、王はこれを怒り、亂平ぐの後ち、大舉してぎりしあを討つこと二回に及びしが、軍皆潰えて効なし。已にして王クセルクセスは更に大舉してぎりしあに迫りしに、その海軍は西紀前四八〇年さらみすに於てあてねの將テミストクレスThemistoclesに破られ、その陸軍は翌年ふらてPlataeaに於てすぱる王パウサニ阿斯Pausaniasに破られ、ペルシア遂に克つこと能はざりき。



堂殿ノんのてるば



圖アソリ平代古  
一之分万百八

上古期 ぎりしあとペルシアの競争時代 ぎりしあとペルシアの争

ペリクレス  
の政治

ギリシア文  
學

哲學・科學

ここに於てギリシアは戰勝ちて國益榮え、ことにあてぬはペリクレスPericlesの力によりて最も隆盛を致せり。ペリクレスはあてぬに民主政治を施き、大に學術を獎勵せり。當時建立せられたるParthenonの殿堂は莊麗を極め、Phidiasの彫刻は高雅にして精巧を盡せり。

文學は上古Homerosホメロスの詩最も名ありしが、後に至りて各種の詩賦戯曲相次ぎて出で、Herodotusヘロドトスは史學の宗と稱せられき。



ステラクソ

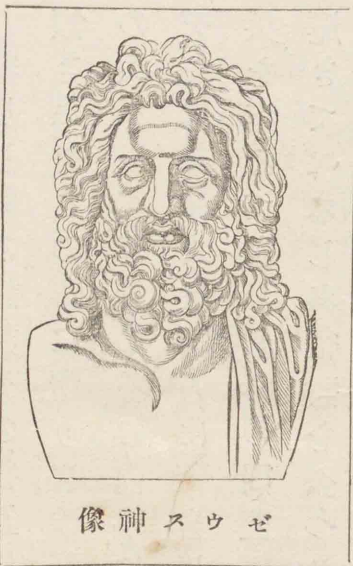
哲學・科學は小あじあの殖民地に起りしが、この頃に至りて漸く盛に、大聖Socratesソクラテス後ちに出でて孔子と並び稱せらる。その弟子Platoプラトンの高弟Aristotelesアリストテレス

宗教

おりんびあ  
祭

衰運

また名あり。アリストテレスは論理學、政治學を講究し、生物・礦物諸學をも研究せり。



像神スウゼ

ギリシアの宗教は自然崇拜の多神教にして、神は山海林泉に住し、人間の如く感情を有するものと思惟せらる。就中Jupiterゼウスはその主神にして、西紀前七七六年以來四年

毎におりんびあに大祭を行ひ、各種の技藝を闘はせり。ギリシア文物の發達は、これ等競技の結果に待つこと多かりき。

ギリシア人は麥を作り、橄欖、葡萄を栽培し、また大理石を採掘せり。山野には牛羊の類を畜へり。紡織刺繡の業盛

に行はれ硝子・陶器の製造また發達せり。商業も大にすゝみ、多くは金貨を用ゐて賣買す。殊にあてぬはしちりあかるたご等と貿易して殷富を致せり。

### 第二章 アレクサンドル大王

ざりしあの諸邦、その後、互に嫉妬争闘して、ともに衰運に傾きぬ。この時に當り、まげどにあ王Philipフィリポ英略あり、精練の兵を以てざりしあの内事に干涉せり。あてぬの雄辯家Demosthenesデモステネスは國人に警告してこれが備を爲ししが、王は兵を率ゐてざりしあの同盟軍を破り、遂にざりしあ諸邦を靡きてべるしあ征討を企つるに至れり。

王の子アレクサンドル大王は西紀前三三四年親ら精銳の軍を督して征途に上り、まづ西あじあを平げてえじぶと

まげどにあの覇業

アレクサン



アレクサンドル

を降し、兵を轉じてがうがめらに進み、べるしあ王Gangameiaダリオス三世の全軍を潰して遂に

べるしあを滅ぼしぬ。

大王なほ進みてふんじあぶをも

定め、ばびろんに都す。大王領土の

安固を得んとし、みづからべるしあ

王の相續者と稱し、べるしあの神を

祭り、べるしあの王女と婚し、將士に

命じてべるしあの女子を娶らしめ、

べるしあの衣食を用ゐ、べるしあの

宗教を奉じ、以て東西領土の人種文

べるしあ亡

大王の東進  
凱旋

大王の經營



大王の死去

大王の國分  
裂す

あれくさん  
どりあ

化を混一し、強固なる王國を建てんとせしに、經營未だ全く成らずして歿せり。時に西紀前三二三年にして、わが孝安天皇の朝に當り、支那は戰國の時なり。

ここに於て諸將相争ひて天下大に亂れ、遂にまげどにあしりあえじふと等の諸國起りぬ。後、しりあは分れて安息大夏等となり、大王の領土は全く瓦解せり。マケドニア シリア バクトリア



館 書 圖

然れども當時交通貿易盛に開け、各地の都市頗る繁榮せり。殊に大王の建てたるあれくさんどりあはえじふとの首都にして、その

繁盛富裕天下に比なし。加之ざりしあの學者多く來りて學術を研究せしより、あれくさんどりあは、また學術の中心となり、その圖書館は藏書の多きを以て著しかりき。

### 第三篇 ろーま大統一時代

#### 第一章 ろーまの外國征討

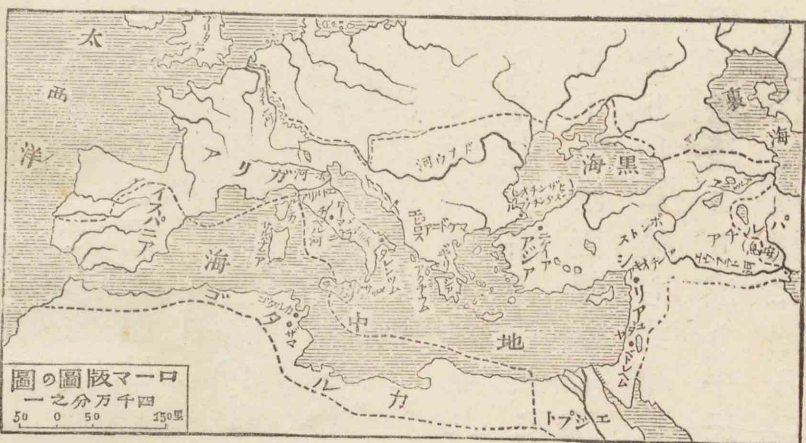
西洋文明の中心と稱せられしざりしあは國土の分裂に伴ひて漸く西方に興れる、Rome ろーまに併吞せられ、Rome ろーまは諸國の文化を綜合して、これを後世の西洋諸國に傳へたり。

ろーまは西紀前七五三年頃イノチちべる河邊に起り、はじめ王政なりしが、後ち共和政治となりぬ。この國また貴族・平民の二階級より成り、平民は重に農耕を業として、貧困に苦しみ、遂には奴隸に陥るの慘狀なりしかば、毎に貴族と争ひて

ろーまの位  
置  
ろーまの創  
立  
社會上の紛  
議

ろーまの半島征服

かるたご



參政の權を得、生活の改良を計らんと欲し、紛争久しく絶ゆることなかりき。

かく内紛盛なりしも、外國の侵入に對しては、よく心を一にして國防に従ひ、漸次近傍諸部落を服し、大にえびろす王ピロスと戦ひて南部いたりありのざりしあ殖民地を併呑し、ここに殆どいたりあ半島を領有するに至りぬ。

この頃あふりか洲の北部にかるたごあり、もとふえにきあの殖民地なり。西地中海に版圖を擴め、

紀前二六四年  
（孝靈の朝  
戰國の交）  
ポエニ戦争

西紀前二一八年  
（孝靈の朝  
秦入下一統  
後四年）

外國征伐并吞

航海貿易を業とし、國運頗る盛なりき。ろーまこれと衝突を起し、西紀前二六四年より一四六年まで三回の大戦争を行へり。これをポエニ戦争といふ。

かるたごは初め海上優勢なりしが遂にろーまに破られ、しちりあを割きて和を結びしかば、かるたごの豪族ハンニバルは、この損失を回復せんとし、いすばにらに兵を募り、西紀前二一八年大舉してろーまを討ち大捷を得たり。然るにろーまの將スキピオ突然かるたごの虚を衝きしかば、ハンニバルは國に歸り、スキピオと戦ひて大敗せり。かるたご乃ち武器戦艦をろーまに獻じ海外の領土を割きて和を乞ひ、國運全く衰へたり

この戦争の間ろーまは、またまけ



ルパニンハ



西紀前一三三年  
(開化の朝)

どにあざりしあを平げ、かるたごを滅ぼし、西紀前一三三年には地中海沿岸の諸國を併呑せり。時は恰も漢の武帝が北匈奴經營を始むるの頃に當る。

### 第二章 ろーまの内紛及び統一

ろーま外征の結果

ろーまは外征の結果として暴富を致し、ざりしあの文物を學び、一時國運隆昌の觀ありしが、豪奢從ひて起り、道德亂れ、庶民財を失ひて一國の元氣衰耗の兆を呈せり。

社會上の争

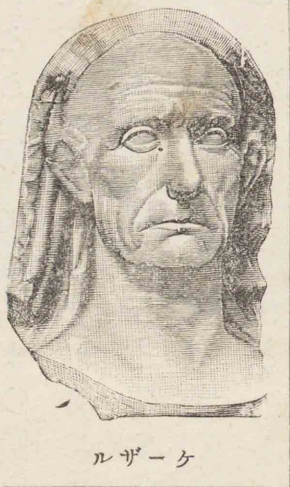
さればろーまには富者貧者の兩黨を生じて相争ひ、その首領たるものは遂に各兵を擁して權力争奪を事とするに至れり。

三頭政治

時に富者黨の領袖ポンペイウスはほんとうゆだや等を平げて功ありしが、元老院と嫌からずして貧民黨の巨魁

三人ニテ政治ヲ取り即チ三ツカチテ三頭政治トシテケイサルノ一統

ケイサルと結び富豪クラッススを誘ひて三頭政治を成せり。ケイサルは智勇兼備の名將なり、辯論に巧に、學術に達し、



ルザーケ

政治に精しく兵法に通ぜり。辛苦經營がありあを定め、威名遠近に轟きぬ。ポンペイウスがケイサルを忌み、これを排斥せんとするを見、一舉してポンペ

原因  
凱カヨネリム  
クラッス、ガ、死ス  
ポンペイウス、死ス

ケイザルの内治  
ケイザルの遭難

ケイザルは商工を奨勵し殖民を興し、また學術を保護し、曆法を改正し治績多かりき。然るに元老院議員中ケイザルの威名を妬むものあり、私に黨を結びてケイザルを刺殺

上古期 ろーま大統一時代 ろーまの内紛及び統一

於テ三頭政治ハ敗レケイサルハ一生涯ノ

西紀前四四年  
(崇神の朝)  
カチラス、カリヤニ、レフィリ、  
コテ戦ヒテ戦死スル也三

天下一統

オクタビア  
ヌスの帝政

西紀前二七年  
(垂仁三年)  
(漢の末)

黄(金)時代ニハ  
マニハ人ロ三十万イ  
リ

皇 Imperator (Imperator) 蒙 (イパーター) 役(名)  
帝 Keiser (Caesar) 凱(カイ) 塞(サイ)  
帝 Jar (—sar)

せり。時に西紀前四四年にして漢の元帝が威を西北に張れるの時なり。

ここに於てケーザルの養嗣子オクタビアヌスはケーザルの部将アントニウスアントニウスともレピウスに兇行者を討滅し更にアントニウスと争ひてこれを滅ぼしえじぶとも併吞して天下を一統せり。

ここに於てろーまの領地は大西洋よりえうふらと河邊に至り、悉くオクタビアヌスの威令に服せしかば、オクタビアヌスは西紀前二七年アウグスツスの尊號を稱してこれを統治し、僅に共和制度の存續せるのみとなれり。世これより後を帝政時代といふ。

第三章 ろーまの文物 キリスト教

ろーまの建築

コロッセウムの現状



文學

アントニウス  
ス帝

當時ろーま府は政治の中心となりて繁榮を致し、廣大壯麗なる建築はアウグスツスの保護によりて成れり、

ばんでおんの神殿、元老院、演技場は大理石を以て築造せられ、殊に演技場の如きは裕に二十萬の觀客を容るゝに足れりといふ。

ろーまの文學はケーザルのがりあ戦争記、キケロの演説集を先驅とし、ホラチウス等のラテン文學光彩を放ち、歴史法律の書甚た多し。

アウレリウス・アントニウスの世安息を破りて支那と交通を開き、また大

上古期 ろーま大統一時代 ろーまの文物

カクティルキナル(頭、役人)

ケイザル、在任ハキケロイナリ、モヤント

二〇

カクティルキナル(頭、役人)  
ケイザル、在任ハキケロイナリ、モヤント  
二〇  
内ニオクタ  
アヌスド  
トモリスハ  
分事アリ  
妹ト離レ  
エヤト  
レクリヨカラ  
ト統スオ  
ピアヌスハ  
ヲ討テエ  
フト、ア  
一ニ勝ナ  
ラカトモ  
十



第二部 中古期

第一篇 キリスト教國

と異教國との  
競争時代

第一章 ろーま帝國の

消長

どいつ人の  
侵略

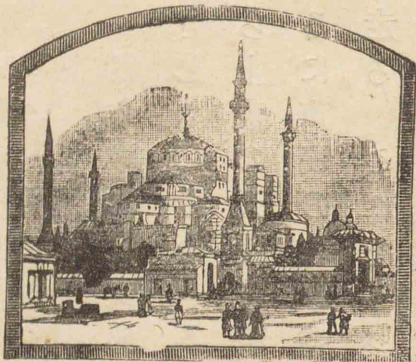
ろーまの衰ふるころ、さきに漢に破られたる匈奴は西走して黒海の北に見はれ、どいつ民族を追ひ拂ひて遠くがりあに侵入し來り、その追ひ拂はれたるどいつ民族はろーま帝國を侵略して數多



西ろーま滅ぶ

五二七年  
(總體の朝  
梁の時代)  
ユスチニア  
ス大帝

内治



堂殿あふいとんせ

の王國を建てしかば、ろーま帝國は五解して西ろーま帝國は西紀四七六年遂にどいつ人オドワケルに滅ぼされたり。時は支那の南北朝の代に當れり。

然るに東ろーまには五二七年ユスチニアヌス大帝位に即き、子ストリウスの異流を排斥して國內の紛擾を絶ち、東の方へるしあを討ち、西方地中海沿岸の舊領を恢復し、諸處に城壁を築き、殿堂を建て、國運を伸張せり。ネストリウス派はべる

しあより唐に傳はれる景教これなり。

帝法律家を會し、舊來の法律を取捨してろーま法典を編成せしめ、支那より蠶桑を移植して養蠶の業を興し、不朽の



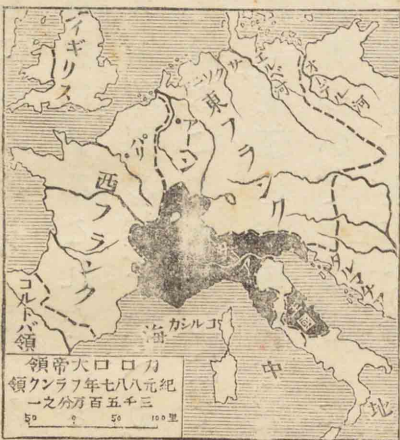
をよーろっばに移植せり。織物・刺繡・硝子・刀劍等の製造工業隆盛を致し、馬とともに貿易の首要品を占め、その商賈は海陸東西に往來していんど、唐と貿易を營めりといふ。

### 第三章 列國の創立

カローマーデル  
の子。ビンは  
朝。表へるに  
ビビン。帝王  
と云ふカロー  
といふなり。入  
りて平定し。土  
をローマ法王に  
す。此處に於  
フランク。ビビ  
ローマは聯合  
カロー大帝は  
クソニーを長  
と自平定し。  
時は八三〇年  
リヤイス。ビ  
を手にし。サラ  
ン人を追辱し  
之を法王に貢  
ハ。〇年十二月二十七日

ふらんくと  
の聯合

カロー大帝  
の即位



さらけんが東ろいまに迫まるに及び、皇帝は多年因襲せる畫像の使用を禁ぜしかば、ろいま法王はその命に服せず、ろいまの教會を獨立せしめ、ふらんくと聯合して教を四方に弘めたり。  
カローふらんくに王たるに及び、大に領土を擴張せしかば、八〇〇年法王レオ三世はカローの頭

法王レオ三世ヨリ、金冠を相傳

身はダニユル北  
エルベナ南はエ  
チバル川西は西  
大なる領土を有  
二四年には歿せ

### 大帝の治績

どいつ。ふ  
らんす起る

八八七年  
(光孝の朝  
唐の末)



カロー大帝の冠戴

上に金冠を加へ、ろいま皇帝と稱せしむ。これをカロー大帝といふ。實に桓武天皇

延暦年間なり。

大帝あーへんに都し、國

Aix-la-Chapelle (Aachen)

内に侯伯僧教正を封じてこれを統治し、學術を奨勵し、農工を保護し、教會を建て、學校を設け、大に教化の普及と人智の啓發とを圖れり。

然るに大帝の歿後幾もなくして帝國分裂し、八八七年にはアルヌルフ東部にどいつ國の基を開き、西部には

七年にはアルヌルフ東部にどいつ國の基を開き、西部には

神聖ローマ  
帝國起る  
九八七年  
(宋太宗の朝)  
神聖ローマ  
帝國  
九六二年  
(村上の朝  
宋の統一後)

八二七年  
(淳仁の朝)  
ノルマン征  
服  
一〇六六年  
(後冷泉の朝  
宋王安石新  
法の前)

八二六年  
(淳仁の朝)  
ノルマン族の東方に侵入せしものは、八二六年のぶごろつ  
どに據りてスラブ族を征服し、王ルーリック遂にろしあの基  
業を開けり。

九八七年フーゴ諸侯を征服してふらんず國を立てたり。  
アルヌルフの後ち帝統絶へ、侯伯教正相會して王を選擧  
し來りしが、さきそにあ公オト一世立つに及び、英邁にし  
て諸侯を抑制し、いたりあOttoの亂を定めしかば、法王シオアンナ  
二世は九六二年カロロ大帝の故事に基き、オト一の頭上に  
金冠を加へて神聖ローマ皇帝と稱せしめ、どいつに君臨せ  
しめたり。實に村上天皇の朝にして、宋の太祖の即位の前  
年に當れり。これより帝權漸く重し。  
ふりたにあには、さきにアンゲル、サククス人侵地して許多  
の王國を立てしが、八二七年エクベルト國內を一統してい  
ざりすの基業を開けり。然るにその後ちノルマン族の侵  
入により國內大に動搖し、一〇六六年の**るまんぢー公ウイ  
レム**に征服せられたり。  
William

第二篇 法王權隆盛時代

第一章 ろーま法王の雄勢 十字軍

ろーま法王は益社會に信用を得て、かく皇帝を承認する  
の勢を得しが、グレゴリオ七世の時には教會の惡弊を刷新  
し、教職の任免、封地の受授は法王の權  
内に屬すべきを宣し、以て益法王の位  
置を高めて世の争鬪殺伐の跡を絶た  
しめんと企てたり。  
どいつ王**ヘンリ四世**は教職の任免



世七オリゴレグ

法王グレゴ  
リオ七世の  
雄圖

王破門に底小  
 僧侶及諸を  
 王窮迫し  
 自王は付大制  
 ノウに逃れ遂に  
 法王と帝室との衝突  
 一〇七七年  
 宋王安石全盛時代  
 法王の権帝王を凌ぐ

十字軍の源因

トリス族。迫害  
 十字軍は遠征して  
 見大いには怒り  
 ニ世にぞいす  
 ギリスト教徒を  
 モントに會合し  
 を待し時は一  
 出でしお皆殺  
 大將となり  
 して王國を組織せり

遠征 一〇九六年 利河の朝 宋哲宗の世

につき異議を唱ふ。法王乃ち王を破門し、破門せられたる君主には服従の義務なきを天下に宣言せしかば、王窮迫し一〇七七年法王に謝罪して僅に局を結べり。これより皇帝は法王に服従し、いざりす王も法王の從屬たるを誓ひ、よろづばは神聖政治の觀を呈せり。この頃キリスト教徒は靈場巡拜を以て無上の功德なりと信じ、いゝるされむの聖墓に詣づるもの多かりしが、毎にとる族に迫害せられて、生還するもの甚少き有様となりぬ。法王乃ち教徒をくれるもんに會し、聖地恢復を議りしかば、衆感激し争ひて赤十字の徽章を着して從軍せり。これを十字軍といふ。一〇九六年ふらんすの諸侯は第一十字軍を率ゐてトルコ族を破り、いゝるされむを占領して王國を組織せり。その

蒙古の西進 一二七〇年 龜山の朝 南宋の末

西の行をサマルカンドも取り  
 征し、山南を征す  
 盜は死す



功を收むること能はず。かくて、一二七〇年更に第七十字軍を起しくも亦功なかりき。この頃蒙古は西あじあを併吞し、拔都はるゝまの南部よ

後ちどいつ皇帝ふらんす王いざりす王等法王の命に應じて前後六回の大十字軍を起ししが或は途中に軋磔し、或は東るゝまと戦ひ、遂に戦

西の行をサマルカンドも取り、中古期 法王權隆盛時代 十字軍 忽必烈は一二九九年宋を征す



拔都は一二三九年は西に侵入し、  
ハンガリーを平定し、海を渡り、  
地中海の連合軍と戦ひ、  
破り大國を立つ時、  
三三

東西の交通

十字軍の中間部を起し、  
都府の勃興、伊太利自由市

十字軍の結  
果

りどいつに侵入し、キリスト教徒が熱心に防禦したる際な  
りしかば、ろま法王は蒙古に使を遣はしてとることを夾み  
撃たんことを議りしかど、唯東西の交通を開き、キリスト教  
を大汗國に傳導したるに止まり、征役の擧は行はれざれき。  
要するによろば諸國は十字軍によりて幾萬の生靈と  
莫大の財産とを失ひしと雖、これによりて社會の情況漸く  
一變し、學術技藝を進め、商業を振興せしかば、得る所また少  
からざりき。

第二章 西よーろばの制度國情

封建制度の  
淵源

法王の權盛なりし頃、西よーろばには封建制度完備せり。  
この制度はふらんくの相國カローが王の私領及び教會領  
をその臣に與へて封土とし、嚴格なる誓約を立て、主従の關

從者の義務

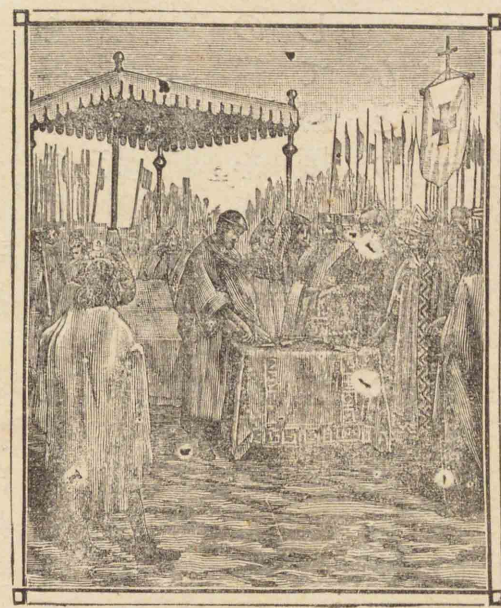
大陸封建の  
缺點

いぎりす憲  
政の初

一二一五年  
順徳の朝  
南宋の末

係を結べるに創まれり。而してその従たるものは、またそ  
の臣に封土を與へて主従の約を結び、小領主はその領土を  
大領主に献じ、更に封土としてこれを受け、かくしてこの制  
度は漸く西よーろばに普及せり。  
主従かく誓約を行ふ時は、主は從者を保護し、從者は封土  
を受くる代りに、主に従ひて戰役に赴き、或は公事に服し、或  
は時に資財を献ずるの義務ありき。  
封建制度はかく完備せる如きも、やくもすれば貴族はそ  
の從者を率ゐて君に叛きしかば、大陸に於ては王權振はず  
して紛擾絶えざりき。  
ひとりいぎりすのみは王權強大にして暴政行はれしか  
ば、一二一五年ラングトン等の侯伯教正は王ジョアンに迫  
り、その立案せる大憲章に署名せしめ、法律に反きて人民を

一 國家の元首は諸國に諮詢して  
 二 領土を領有する時は諸國の  
 三 國主たりしや、古に臣民を拘  
 禁せずべからず



名署法憲のンア、ソ

處罰せず、公議によりて賦斂を課すべきを誓はしめたり。その後ち王ヘンリ三世の時、シモン等また王に迫り、一二六五年代議院を開かしめたり。これ世界に憲法政治あるの始とす。

封建制度の弛廢の原由  
 一、十字軍の起るや、侯伯は軍資に窮して多くその封土を典賣せしかば、歸國の後に至りて之を回復するに由なく、封建制度は漸く弛廢せり。

封建の世貴族驕恣にして細民と婦女とを虐待侮辱せし

五、農民を兵として用ふるに及りしこと。  
 六、王權の發達、封建の弛廢。  
 七、平民の反抗。  
 八、十字軍の起るや、侯伯は軍資に窮して多くその封土を典賣せしかば、歸國の後に至りて之を回復するに由なく、封建制度は漸く弛廢せり。

武士



騎 義

かば、武士起りてこれが救済を計れり。武士は信義を重じ、武勇を尙び、義俠を旨とす。或は偽戦を演じて士氣を鼓舞し、また決闘に與りて貧弱無辜の民を救へり。その戦に捷ちて紳士淑女の賞賛敬愛を得るは武士の榮譽とする所なりき。

文學美術

自由都市

宗教の全盛と武士の發達とは文學美術に影響し、武士を脚色せる文學見はれ、教會風また城壁風の建築も起りぬ。當時都市は十字軍の結果として隆盛に赴き、ベネチア、フィレンツェ等いたりあ、の諸市は、地中海及びいんどの貿易を營みて最も殷富を致し、どいつの北に起れるは、ハンざ同盟は、九十五市より成れる商業組合にして、すういすの諸市とともに

中古期 法王權隆盛時代 西よるつばの制度國情  
 三、七

農業

自治を営み東西の貿易また盛なりき。農業は、カ、ロ、ロ大帝の保護によりて大に進歩し、東西の交通盛なるに及びては、米、麥、甘蔗、葡萄、馬鈴薯の栽培漸く盛にして、牧畜、養蠶も諸處に行はれたり。砂糖の製造、綿、絹の織物は重にいたりあ、ふ、らんすの地方に盛なりき。されど農民は貴族の壓抑に苦しみ、生活の情況憐むべきものなりき。

第三篇 法王權の衰頹時代

第一章 法王の失權 文運の復興

第十一世紀より第十三世紀まで、よろ、ばを風靡せし法王は第十四世紀に至りてその權勢を失ひぬ。ふ、らんす王フリーポ四世は盛に工業を奨励し、法律を改正し、教會に税を課せしかば、こゝに法王と衝突を起し、一三〇九年には法王

法王ふらんす王に従ふ

一三〇九年北條貞時元の中頃

人心の發動

は一時あ、び、におんに擁立せられ、ふ、らんす王に左右せらるるに至れり。加之十字軍の失敗は人をして法王の主權と教會の制度を疑はしめ、久しく宗教の束縛によりて萎縮せる人心は、ここに再び發動の端をひらけり。

古文研究

いたりあの諸市が海外と交通するに及び、ぎりしあより學者を聘してぎりしあ語を學び、その天文、醫學、數學、哲學等を究め、またらてん語を學びてろーま人の思想を究めたり。これ等の學者を人道派學者といふ。人道派學者は教制の非を覺りて宗教改革の要を説くに至れり。

加之一四三六年、John Gutenberg ジョアングーテンベルグなるものまいん

つに木製活字の法を發明せしかば、聖書古書並に人道派學者の論文は易く世上に擴まれり。

紅蘭人ローラドコスタリイ  
バジョアン  
後、至りてジョアン人道派學  
シテエルの二人、亦生、後、  
も發明せり後、世、之、本、後、  
ち、時、は、一、四、三、六、年、  
後、ホ、の、皮、府、を、  
て、發明、す、  
は、ア、ン、グ、ー、テ、ン、  
を、印、刷、す、  
を、印、刷、す、  
宗、教、は、  
印、刷、す、

中古期 法王權衰頹時代 法王の失權 文運の復興

一四七四、一五六四  
 一四七四、一五六四  
 一四七四、一五六四

美術の復活  
 フォン・アム・シヨット  
 フォン・アム・シヨット  
 フォン・アム・シヨット



活版の發明

美術もまたざりしあろいまの古  
 風を復興折衷し、所謂復活式なるも  
 のを起せり。ミケル・アンジェロは  
 セント・ペテロの教會を建てて、その  
 名著はる。氏は彫刻に長じ繪畫に  
 巧に當時の大家ラファエロと並び稱  
 せらる。

第二章 封建武士の失權 火器の發明

ふらんす王カロロ四世の歿後、ふらんすは百有餘年の間、  
 斷續いざりすと干戈を交えしが、この戦に歩兵を雇ひて軍  
 隊を補充するの利便なるを發明せしかば、よーろっば諸國は  
 封土を授くるの必要なくして、却て貴族の專横を制するの

百年戦争の征し、後英國内は放  
 蕪同族戦争起り、これはヨーク家と  
 ラカスター家の戦争なり、一四五五  
 一四八五の間にあり、是はランカスター  
 家のヘンリ七世とヨーク家のエドワード  
 の戦争によりて、戦争の終り、和議が

常備軍の設置  
 火器の發明  
 義騎の衰頹

便なるを思ひ、争ひて歩兵を採用し、常備軍を置くに至り、封  
 建制度は頹敗し王權益重くなりぬ。  
 加之當時火器發明せられ、これを戦争に利用せしかば、鐵  
 製の大砲はよく城壁を破壊し、小銃はよく武士の甲冑を貫  
 くを以て、貴族義騎は軍事上社會上全くその位置を失ひぬ。

第三章 オスマンリトルコの勃興

新陸地發見

オスマンリトルコ  
 興  
 東ろいまの滅亡  
 義騎の衰頹

西あじあにはオスマンリトルコ、十字軍の末期、蒙古に追  
 はれ來りしが、第十四世紀末には勢漸く強く、東方に勃興せ  
 る帖木兒と相競ひ、一四〇二年トルコは一時帖木兒に滅ぼ  
 されたり。然るに帖木兒の滅亡後、トルコ再び起りて東ろ  
 一まに迫り、王ムハメツド二世は一四五三年遂にこんすた

イラン國を衰へ、  
 トルコ人の酋長が  
 スマンリトルコ  
 州に勢力を張る  
 マカドニア州に  
 平に力加り、他  
 帝コンスタンチ  
 アルを圍む所  
 加リ、王シヤ  
 ンド大將とあり、  
 年あり、所が、  
 故軍を破り、  
 中古期 法王  
 聖類時代 オスマンリトルコ  
 の勃興



一四九二年は、  
コロンブスの発見  
一五〇一年は、  
ピザリョの発見  
一五〇二年は、  
マゼランの発見  
一五〇七年は、  
バタヴィアの発見  
一五二二年は、  
マゼランの発見  
一五二五年は、  
マゼランの発見  
一五二九年は、  
マゼランの発見  
一五三二年は、  
マゼランの発見  
一五三五年は、  
マゼランの発見  
一五三八年は、  
マゼランの発見  
一五四一年は、  
マゼランの発見  
一五四四年は、  
マゼランの発見  
一五四七年は、  
マゼランの発見  
一五四九年は、  
マゼランの発見  
一五五二年は、  
マゼランの発見  
一五五五年は、  
マゼランの発見  
一五五八年は、  
マゼランの発見  
一五六一年は、  
マゼランの発見  
一五六四年は、  
マゼランの発見  
一五六七年は、  
マゼランの発見  
一五六九年は、  
マゼランの発見  
一五七二年は、  
マゼランの発見  
一五七五年は、  
マゼランの発見  
一五七八年  
マゼランの発見  
一五八一年は、  
マゼランの発見  
一五八四年は、  
マゼランの発見  
一五八七年は、  
マゼランの発見  
一五九〇年は、  
マゼランの発見  
一五九三年は、  
マゼランの発見  
一五九六年は、  
マゼランの発見  
一五九九年は、  
マゼランの発見  
一六〇二年は、  
マゼランの発見  
一六〇五年は、  
マゼランの発見  
一六〇八年は、  
マゼランの発見  
一六一一年は、  
マゼランの発見  
一六一四年は、  
マゼランの発見  
一六一七年は、  
マゼランの発見  
一六一九年は、  
マゼランの発見  
一六二二年は、  
マゼランの発見  
一六二五年は、  
マゼランの発見  
一六二八年は、  
マゼランの発見  
一六三一年は、  
マゼランの発見  
一六三四年は、  
マゼランの発見  
一六三七年は、  
マゼランの発見  
一六四〇年は、  
マゼランの発見  
一六四三年は、  
マゼランの発見  
一六四六年は、  
マゼランの発見  
一六四九年は、  
マゼランの発見  
一六五二年は、  
マゼランの発見  
一六五五年は、  
マゼランの発見  
一六五八年は、  
マゼランの発見  
一六六一年は、  
マゼランの発見  
一六六四年は、  
マゼランの発見  
一六六七年は、  
マゼランの発見  
一六七〇年は、  
マゼランの発見  
一六七三年は、  
マゼランの発見  
一六七六年は、  
マゼランの発見  
一六七九年は、  
マゼランの発見  
一七八二年は、  
マゼランの発見  
一七八五年は、  
マゼランの発見  
一七八八年は、  
マゼランの発見  
一七八九年は、  
マゼランの発見  
一七九二年は、  
マゼランの発見  
一七九五年は、  
マゼランの発見  
一七九八年は、  
マゼランの発見  
一八〇一年は、  
マゼランの発見  
一八〇四年は、  
マゼランの発見  
一八〇七年は、  
マゼランの発見  
一八一〇年は、  
マゼランの発見  
一八一三年は、  
マゼランの発見  
一八一六年は、  
マゼランの発見  
一八一九年は、  
マゼランの発見  
一八二二年は、  
マゼランの発見  
一八二五年は、  
マゼランの発見  
一八二八年は、  
マゼランの発見  
一八三一年は、  
マゼランの発見  
一八三四年は、  
マゼランの発見  
一八三七年は、  
マゼランの発見  
一八四〇年は、  
マゼランの発見  
一八四三年は、  
マゼランの発見  
一八四六年は、  
マゼランの発見  
一八四九年は、  
マゼランの発見  
一八五二年は、  
マゼランの発見  
一八五五年は、  
マゼランの発見  
一八五八年は、  
マゼランの発見  
一八六一年は、  
マゼランの発見  
一八六四年は、  
マゼランの発見  
一八六七年は、  
マゼランの発見  
一八七〇年は、  
マゼランの発見  
一八七三年は、  
マゼランの発見  
一八七六年は、  
マゼランの発見  
一八七九年は、  
マゼランの発見  
一八八二年は、  
マゼランの発見  
一八八五年は、  
マゼランの発見  
一八八八年は、  
マゼランの発見  
一八九一年は、  
マゼランの発見  
一八九四年は、  
マゼランの発見  
一八九七年は、  
マゼランの発見  
一九〇〇年は、  
マゼランの発見

いすばにあ  
の殖民  
世界一週  
一五二二年  
後柏原即  
位式の年  
明王守仁  
の頃

影響

航し、一四九二年遂にさんざるばどるに着し、ついでさうば等  
の諸島に殖民して歸れり。後殖民の總督より華族に任せらる  
これよりいすばにはあは船を出して中央あめりかに殖民  
し、漸くめきしこへる「ちり」を征服して無限の金銀を得  
ぼるとがる人はぶらじるに至りて殖民せり。  
これと同時にマカリアエンスは南あめりかを回航し、一五  
二一年太平洋を横ぎりてふりびん群島に至り、その部下遂  
に世界一週の功を竣へていすばにはあに歸れり。  
この新世界発見と世界の球形を實證したるとは、大によ  
ろっぱ人百般の思想を新にしたるのみならず、いなりあ地  
方の貿易は稍衰へて、貿易の中心はりすばあに移り印度の  
香料・寶玉・新大陸の金銀等は皆ここに輻湊し、綿・甘蔗・珈琲等  
は新大陸の沃土に移植せられ煙草・馬鈴薯等は各國に培養

せらるゝに至り、西洋經濟の上にも一大變動を見るに至れ  
り。  
此新陸地発見の爲に地中海沿岸より、伊太利自中東及び、  
をを受けり  
西班牙・葡萄牙は、且米利加印度に多くの殖民地を有せり、  
より殖民地は始く、獨立すよ、三ホリ印

一五二七  
ルーテルは、フランドル、ベルギー、フランス、九十五歳  
を没す。その遺言を以て、

一、信の自由を主張せしむ。  
二、新大陸の発見。  
三、新大陸の発見。  
三、免罪符の禁止（免罪符は、極悪）

宗教改革の  
原因

一五二七年  
（後柏原の朝  
王守仁の頃）

ルーテルは、一四八三年、獨逸、ザクセン、アウクスブルグ  
の教区に在り、ルーテルは、ルーテルは、ルーテルは、  
ルーテルは、ルーテルは、ルーテルは、ルーテルは、  
ルーテルは、ルーテルは、ルーテルは、ルーテルは、

第三部 近古期

第一篇 政教上紛争の時代

第一章 宗教改革

古學の研究益進むに及び、教會の弊習益暴露し、殊に法王



ルテール

がセント・ペテロ殿堂建立を名と  
し、どいつに免罪符販賣を許すに  
及び、一五二七年ルテールまづ立  
ちて抗議を唱へ、キリスト教は聖  
書にのみ據るべきを立論せり。

一 フェルデナンド  
あらごん王

イサベラ  
カスチリア女王

(5) マキシミアノ一世  
どいつ帝

マリヤ  
ファイリポ

(6) カロロ五世  
どいつ帝

いすばにあ王

(7) フェルデナンド一世

(8) マキシミアノ二世

カロロ五世  
の雄勢  
の處置

新教の樹立  
一五二九年  
（後奈良の朝  
王守仁歿年）

新教の蔓延

時にどいつ王カロロ五世はいすばにあ王を兼ね勢正に  
盛なりしかば、一舉して宗教の紛議を定めんとし、らおるむす  
に國會を開き、ルーテルの所説を異派なりと決議せしめた  
り。然るにふらんす王フランシス一世は、カロロ五世の勢  
力を憂ひてどいつに侵入せしかば、王は易くこの決議を實  
行すること能はず。  
かくて亂全く平ぐに及び、カロロ五世は一五二九年すば  
いえるに國會を開きしに、ルーテル派は、その決議に抗議し  
遂に新教の一派を立てたり。之をプロテスタントとす。  
ここに於てルーテル派の新教はどいつ諸州に蔓延して  
すうてんでんまるくに及び、じらねぶに説けるカルビン  
の新教はふらんすねーでるらんどすこつらんどに入りて  
勢ありき。  
Netherland (Nederland) Scotland

近古期 政教上紛争の時代 宗教改革

スチムは、ルンペン  
と云ふ者あり、彼  
つた大いなる感  
性、或るに、  
カルビン、  
一五三二年、  
教皇、  
一、  
新教

ルテールは、  
功、  
其友、

いざりす新  
教を奉ず

舊教の反省

舊教の反省  
イェス・イタ  
社  
一五四〇年  
後奈良の朝  
明嘉靖帝の  
頃

わらぐすぶ  
るの宗教  
媾和  
一五五五年  
川中島戦  
争の頃  
明嘉靖  
年間

いざりすも王ヘンリ八世の時法王との關係を絶ち、エド  
ワルド六世の時全く新教を奉ずるに至りぬ。

かく新教の勢益盛なるに及び、皇帝はとれんとに會議を  
開きて舊教の弊害を改善し、法王はイェス・イタ教社を利用し  
て舊教の傳播につとめ、大に新教に對抗せり。

イェス・イタ教社は一五四〇年イグナチオ・ロヨラの組織せ  
るものにして、熱心に布教教育に従事せるものなり。教社  
の領袖ザビエルは、天文年間わが國に布教せ  
り。所謂切支丹宗は即ちこれなり。

かく皇帝は最も意を舊教恢復に盡ししも遂に目的を達  
すること能はず、一五五五年あらぐすぶるの宗教媾和に  
よりどいつにルーテル派の新教自由を公許せり。

カ、五世は弟に(一五五六)位を譲り  
其子にカール五世トイフニテ、  
イェス・イタ教社に對しては、  
舊教の反省の如く、  
新教の傳播を許さず、  
舊教の恢復を期す。

カ、五世は弟に(一五五六)位を譲り  
其子にカール五世トイフニテ、  
イェス・イタ教社に對しては、  
舊教の反省の如く、  
新教の傳播を許さず、  
舊教の恢復を期す。

カ、五世は弟に(一五五六)位を譲り  
其子にカール五世トイフニテ、  
イェス・イタ教社に對しては、  
舊教の反省の如く、  
新教の傳播を許さず、  
舊教の恢復を期す。

第二章 いざりす女王エリザベタ

いざりす女王エリザベタ

皇帝カ、五世は百事皆心と違ひ内治外交全く失敗せ  
しかば、一五五六年位をその弟フェルチナンドに譲りてどい  
つを與へ、その子フィリポ二世にいざりすを與へたり。



世二ポリイフ

起し、オランジュウイルレムを戴き、一五八一年遂に獨立を宣

言せり。これ即ちねらんだ國なり。

おらんだの  
獨立  
一五八一年  
正親町の朝  
明萬曆帝の  
頃

おらんだの  
獨立  
一五八一年  
正親町の朝  
明萬曆帝の  
頃

近古期 宗教上紛争時代 いざりす女王といざりす王





第三章 三十年戦争

三十年戦争の源因

ぼへみあの反亂  
一六一八年  
後水尾の朝  
明萬曆の末

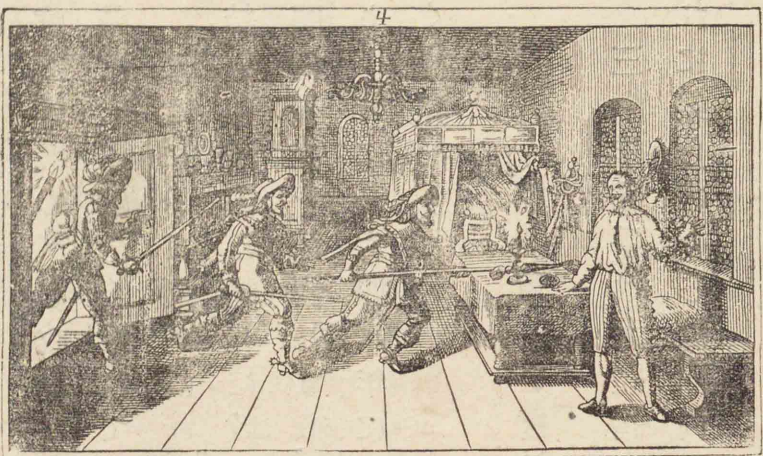
でんまるくすうえい  
でんの干渉

かくいざりすおらんだ諸國が隆運に向へるに際し、どいつは姑く宗教上の紛議を絶ちて、農工學藝稍發達の運に向ひしも、新舊兩派の競争はなほ内部に蟠まりしかば、どいつは未だ安きこと能はず。されば皇帝（五世）はいすばにあと結びて實力を養ひ、帝國を一統し、祖國の利益を増進せんことを企て、一六一八年遂にぼへみあの新教寺院を毀てり。ここに於て新教徒は兵を擧げてこれに抗し、諸國またその聯合を憂ひてこれに干渉し、終に一大騷亂を起せり。

皇帝フェルヂナンド二世はぼへみあの亂を定め、更に他の新教諸侯を征服せり。然るにてんまるく王（キリストチアン）キリスチアン四世（スワット）すうえい王グスタフ・アドルフは前後相ついで帝國

ワレンスタインは殺せられた

ふらんすの干渉



ワレンスタインの暗殺の圖

に侵入せしかば、帝國頗る危かりき。時にワレンスタイン（一六三二年）といへるもの兵を募りて敵兵に當り、武威赫々よく國難を救へり。されどワレンスタインは帝國の統一と國權の振張とのみを圖り、新舊教徒の區別に注意せざりしかば、舊教徒等はこれを喜ばず、ワレンスタインの二心あるを疑ひてこれを黜け、後ち殺害するに至れり。

どいつ已に大功臣を失ふに當り、ふらんすの相リシウリウ（リッヘン）



勤王山黨  
國會黨  
後  
ホイック黨  
トリー党

航海條例  
治  
共和政  
の世  
明滅亡の  
第一革命  
一六四九年  
徳川家光  
の世

命 いざりす革  
一六八八年  
元祿元年  
清尼布楚  
條約の前

クロンウェルは國會を改造し、王の罪狀を審問して王に死刑を宣告し、一六四九年遂に王を弑せり。これを第一革命といふ。

クロンウェル乃ち共和政府を建ててその保護主となり、熱心に秩序の保全と國威の宣揚とをつとめ、航海條例を發布しておらんだの航海貿易を妨害し、おらんだの海軍を破りて海上にいざりすの勢力を發展せしめき。然るにクロンウェルの歿後溫和黨起り前王の子カロロ二世を迎へて王位に即かしむ。これを王政復古といふ。

カロロ二世の後ち、その弟ジェームス二世立つ。王は王權擴張と舊教保護とを圖り、法令を無視して舊教徒を將校に任命し、恣に人民を捕縛せしかば、國民は民權の蹂躪せらるるに忍びず、一六八八年使をおらんだに遣はし、統領ウイル

化 いざりす文

ふらんすの  
王權伸張

ム三世及びその妃マリアを迎へ王及び女王をして憲法を遵守すべきを誓はしめたり。マリアはジェームス二世の女なり。ジェームス二世はふらんすに逃る。これを第二革命といふ。ここに於ていざりすの立憲自由確定し、商業貿易隆昌を致しぬ。

この時代は文學科學も大に發達し、<sup>Newton</sup>ニュートンは引力の原則を説き、<sup>Locke</sup>ロックは哲學に名を擧げたり。また<sup>Milton</sup>ミルトン等の文學者も出てていざりす文學の光を放ちぬ。

### 第二篇 強國の勃興時代

#### 第一章 ふらんすの全盛

この頃ふらんすは漸く王權を伸張し、ルイス十三世の時

ルシウリウーはルイ十三世を  
ぐ位に押し下りてなり彼は  
ルイ十三世は政明は第一流であ  
るが本國は正統派の流にあり  
二六二年にルイ十三世が崩  
り二年自刃せり初めは彼は  
はよりて盛んとなり彼は  
この著はルイ十三世の  
國家の権威を自ら押し下  
りしめ伊國を  
一六六一年  
一六六二年  
一六六三年  
一六六四年  
一六六五年  
一六六六年  
一六六七年  
一六六八年  
一六六九年  
一六七〇年  
一六七一年  
一六七二年  
一六七三年  
一六七四年  
一六七五年  
一六七六年  
一六七七年  
一六七八年  
一六七九年  
一六八〇年  
一六八一年  
一六八二年  
一六八三年  
一六八四年  
一六八五年  
一六八六年  
一六八七年  
一六八八年  
一六八九年  
一六九〇年  
一六九一年  
一六九二年  
一六九三年  
一六九四年  
一六九五年  
一六九六年  
一六九七年  
一六九八年  
一六九九年  
一七〇〇年

ルイ十四世の内治經營

一六六一年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六二年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六三年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六四年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六五年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六六年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六七年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六八年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六六九年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七〇年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七一年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七二年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七三年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七四年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七五年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七六年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七七年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七八年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六七九年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八〇年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八一年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八二年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八三年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八四年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八五年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八六年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八七年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八八年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六八九年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九〇年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九一年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九二年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九三年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九四年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九五年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九六年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九七年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九八年 德川家綱 康親帝即位前年  
一六九九年 德川家綱 康親帝即位前年  
一七〇〇年 德川家綱 康親帝即位前年

には攝政太后マリア國會を廢止しリシウリウー、マザレンの  
二相は相ついで貴族の勢を殺ぎ、王權益固くなりぬ。



世四十四スイル

ペールを信任して財政を革新し、軍隊を整備し、製造工業を  
奨励し、運搬貿易を保護し、外にはあめりか及び印度に殖民  
地を拓き、またいすばにあおらんだどいついぎりす等と戦  
ひ土地を獲ること少からざりき。  
さればふらんすの領地は四方に擴がり、國勢頓によろつ

一六六一年ル

イス十四世位に

即き萬機を親裁

して、朕は國家な

りと宣せり。ま

た大藏大臣コル

を

を

を

を

を

ルイ十四世の内治經營

一七〇〇年  
元祿年間  
康熙年間

ばの首位を占むるに至れり。ふらんすの絹布毛織の製造  
は著しく發達し、硝子細工は精巧を極めて雷名を世界の市  
場に轟かし、華麗なる建築はふらんすの隆盛を表彰せり。  
加之朝廷には紳士淑女莊嚴なる禮式を用ひて朝廷の威嚴  
を装ひ、衣服の艷麗美術の華美は靡然として朝野の風を成  
し、よろろば諸國は喜びてこれにならへり。文學もまた大  
に進みてラレシヌ、Cornelle、  
となり、従ひてふらんす語は外交社會の通語となれり。世  
この時代をルイス十四世の代といふ。  
かくルイス十四世は思ふ所成らざるなく、欲する所得ざ  
ることなかりしかば、一七〇〇年いすばにあ王カロロ二世  
の嗣子なきに乘じ、その孫フィリポをいすばにあに擁立し、フ  
リポ五世と稱せしむ。然るに皇帝レオポルド一世は、その



和目的を過す。是に政州を幕府に歸す。其の枝を練習し、英に行き翌年再かオランダに歸り、オランダの納維に入り、イタリヤに行かん  
 たり。時止衛兵の内乱をより、歸りて内乱を静め、嚴密に度  
 六二

一七九二年  
 一七九三年  
 一七九四年  
 一七九五年  
 一七九六年  
 一七九七年  
 一七九八年  
 一七九九年  
 一八〇〇年  
 一八〇一年  
 一八〇二年  
 一八〇三年  
 一八〇四年  
 一八〇五年  
 一八〇六年  
 一八〇七年  
 一八〇八年  
 一八〇九年  
 一八一〇年  
 一八一一年  
 一八一二年  
 一八一三年  
 一八一四年  
 一八一五年  
 一八一六年  
 一八一七年  
 一八一八年  
 一八一九年  
 一八二〇年  
 一八二一年  
 一八二二年  
 一八二三年  
 一八二四年  
 一八二五年  
 一八二六年  
 一八二七年  
 一八二八年  
 一八二九年  
 一八三〇年  
 一八三一年  
 一八三二年  
 一八三三年  
 一八三四年  
 一八三五年  
 一八三六年  
 一八三七年  
 一八三八年  
 一八三九年  
 一八四〇年  
 一八四一年  
 一八四二年  
 一八四三年  
 一八四四年  
 一八四五年  
 一八四六年  
 一八四七年  
 一八四八年  
 一八四九年  
 一八五〇年  
 一八五一年  
 一八五二年  
 一八五三年  
 一八五四年  
 一八五五年  
 一八五六年  
 一八五七年  
 一八五八年  
 一八五九年  
 一八六〇年  
 一八六一年  
 一八六二年  
 一八六三年  
 一八六四年  
 一八六五年  
 一八六六年  
 一八六七年  
 一八六八年  
 一八六九年  
 一八七〇年  
 一八七一年  
 一八七二年  
 一八七三年  
 一八七四年  
 一八七五年  
 一八七六年  
 一八七七年  
 一八七八年  
 一八七九年  
 一八八〇年  
 一八八一年  
 一八八二年  
 一八八三年  
 一八八四年  
 一八八五年  
 一八八六年  
 一八八七年  
 一八八八年  
 一八八九年  
 一八九〇年  
 一八九一年  
 一八九二年  
 一八九三年  
 一八九四年  
 一八九五年  
 一八九六年  
 一八九七年  
 一八九八年  
 一八九九年  
 一九〇〇年

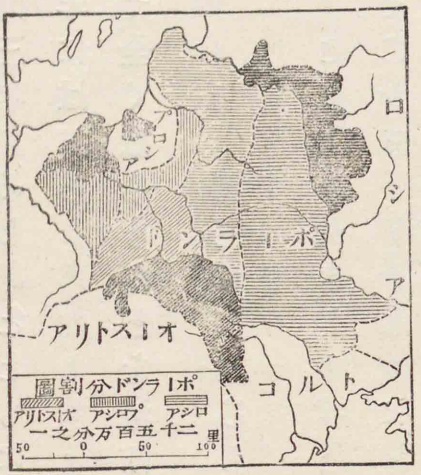
しべりの拓殖

兵式を摸して士卒を訓練し、學校を建て、工場を設け、政教の大權を握りて銳意國內の改良を圖れり。  
 かくてすうえーでん王カロロ十二世が幼冲にして國內稍動搖するの兆あるに乗じ、帝はでんまるくぼーらんと聯合してすうえーでんを攻撃せり。カロロ十二世は連りに聯合軍を破りけるが、ぼるたばの一戦に敗れてとるこに走り、ついで國に歸りて歿せり。すうえーでん乃ち恐怖して一七二一年にすうえーに和を成し、ぼると海東岸の地をろしあに譲れり。  
 ペテロはせんとペてるぶるく府を建ててここに都し、大に國政を改良し、陸海軍を整備し、道路を築き、運河を通じ、盛に製造貿易を奨励して國運を伸張せり。  
 これよりさきろしあは盛にしべりあ開拓に従事し、ペテ

尼布楚條約より銀字山嶺より北方の地を取リオホーツク海にまで取れり

カタリナ二世の分割

一七七二年  
 一七九三年  
 一七九四年  
 一七九五年  
 一七九六年  
 一七九七年  
 一七九八年  
 一七九九年  
 一八〇〇年  
 一八〇一年  
 一八〇二年  
 一八〇三年  
 一八〇四年  
 一八〇五年  
 一八〇六年  
 一八〇七年  
 一八〇八年  
 一八〇九年  
 一八一〇年  
 一八一一年  
 一八一二年  
 一八一三年  
 一八一四年  
 一八一五年  
 一八一六年  
 一八一七年  
 一八一八年  
 一八一九年  
 一八二〇年  
 一八二一年  
 一八二二年  
 一八二三年  
 一八二四年  
 一八二五年  
 一八二六年  
 一八二七年  
 一八二八年  
 一八二九年  
 一八三〇年  
 一八三一年  
 一八三二年  
 一八三三年  
 一八三四年  
 一八三五年  
 一八三六年  
 一八三七年  
 一八三八年  
 一八三九年  
 一八四〇年  
 一八四一年  
 一八四二年  
 一八四三年  
 一八四四年  
 一八四五年  
 一八四六年  
 一八四七年  
 一八四八年  
 一八四九年  
 一八五〇年  
 一八五一年  
 一八五二年  
 一八五三年  
 一八五四年  
 一八五五年  
 一八五六年  
 一八五七年  
 一八五八年  
 一八五九年  
 一八六〇年  
 一八六一年  
 一八六二年  
 一八六三年  
 一八六四年  
 一八六五年  
 一八六六年  
 一八六七年  
 一八六八年  
 一八六九年  
 一八七〇年  
 一八七一年  
 一八七二年  
 一八七三年  
 一八七四年  
 一八七五年  
 一八七六年  
 一八七七年  
 一八七八年  
 一八七九年  
 一八八〇年  
 一八八一年  
 一八八二年  
 一八八三年  
 一八八四年  
 一八八五年  
 一八八六年  
 一八八七年  
 一八八八年  
 一八八九年  
 一八九〇年  
 一八九一年  
 一八九二年  
 一八九三年  
 一八九四年  
 一八九五年  
 一八九六年  
 一八九七年  
 一八九八年  
 一八九九年  
 一九〇〇年



一世の時には黒龍江邊を侵して清國と衝突し、尼布楚に條約を結びて國境を議定し、更に恰克圖に互市場を開き、驛傳を設け、大にしべりあ内政の改革を行ひき。  
 ペテロ一世の後ち女帝カタリナ二世出づ。ぼーらんと王を擁立してギリシア教を公許せしめしかば、舊教徒これを喜ばず、とるこの援を得て叛を起せり。カタリナ二世乃ち兵を派してとるこを破り、ぶろしあ、おーすと、りあ兩國と議り、一七七二年ぼーらんとの一部を分領し、とるこよりくりむを併せたり。  
 ぼーらんとはこの分割を憤ほりて起ちしかば、女帝は一七





フレデリックは孤軍を率ゐて連りに敵軍を破りしが、この間にいざりすはいんどあめりか等の殖民地に大捷を得しかば、ふらんすまづ和を乞ひ、一七六三年兩國はぱりーに和を成せり。是に於て、ふろしあとねーすととりあとはふべるつすぶるぐに和し、いざりすはふらんすよりかなだを得、ふろしあはしれしあ領有を確認せられたり。

戦況

一七六三年  
（徳川家治の  
乾隆年間）

講和

どに葛藤を開き兩國遂に兵火を交へ、いざりすはふろしあと同盟し、ふらんすはおーすととりあを援けしかば七年の大戦また起りぬ。

フレデリックは孤軍を率ゐて連りに敵軍を破りしが、この間にいざりすはいんどあめりか等の殖民地に大捷を得しかば、ふらんすまづ和を乞ひ、一七六三年兩國はぱりーに和を成せり。是に於て、ふろしあとねーすととりあとはふべるつすぶるぐに和し、いざりすはふらんすよりかなだを得、ふろしあはしれしあ領有を確認せられたり。

大王は戦後宮殿を建築して貧民を賑はし、また文學美術を奨励し、司法權の獨立を確認し、ふろしあをして益隆運に向はしめたり。さればふろしあは勢威大に揚り遂に強國の列に加はりてぱーらんど分割に與かるの位置を得たり。

英國の殖民地  
一七六三年  
（徳川家治の  
乾隆年間）

第四章 よーろっぱ諸國殖民の形勢  
合衆國の獨立

今翻りて殖民の形勢を観るに、いざりすはふらんすとがる兩國人は夙に殖民貿易を爲ししが、政府は殖民地の利益吸収をつとめ、布教に力を盡ししかば、遂に土人の感情を害し、久しく勢力を有つこと能はざりき。

ここに於ていざりすはふらんすと兩國は東いんど商社を建てて大に經營する所ありしが、兩者の間に激烈なる競争を起し、いざりす人は極東をおらんたの手に委し、一六二三年以來おらんたはふらんすと争ひて、いんど經營に全力を傾注せり。

よーろっぱの政争盛なるに及び、殖民地もまた戦闘を見る

いざりすの  
おらんたの  
殖民

（徳川家治の  
乾隆年間）

いざりす  
いんどに勢  
を得  
一七五七年  
（徳川家重の  
清乾隆年）  
間  
あめりか殖  
民地の激昂

印紙條例  
一七五五年  
（徳川家重の  
清乾隆年）  
間  
あめりか殖  
民地の激昂

一七七三年は  
ボストンにて  
独立を唱ふ

殖民地の好  
運

に至りしが、いざりすは優勢なる海軍により毎に戦勝を得て多くの殖民地を擴張し、一七五七年にはクライブがぶらっしーの大捷によりていんどの形勢も定まりき。  
然るにいざりすはかく数度の大戦に國威を發揚せしも財政頗る困難なりしかば、政府はあめりかの殖民地に内地税を課したり。殖民十三州はこれを憤りてニューヨークに會し、代議士を出さざるものは納税の義務なきを論じ、フランクリンを遣はして、その廢止を請願せしめたり。政府はこれを聽許せしも更に茶等に税を課せしかば、殖民地は益激昂して亂を作こし、ふらいてるふらいてるに會議を開き、ワシントン<sup>Washington</sup>を總督とし、獨立宣言書を發表して援を列國にもとめたり。  
いざりすこれを討ちて易く平ぐる能はず、ふらんすは軍

ウオシント  
ン  
ボルトガルは、北極  
と南極  
一七八一年ワシントンに  
コロンブスを  
ヨークタウンに破す



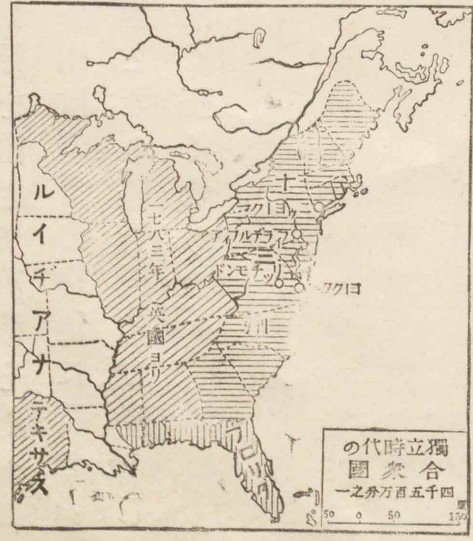
ントンショワ

艦を發して殖民を援助し、ろしあは中立同盟を結びていざりすの行動を妨害せり。  
いざりすはおらんだの海軍を破りて中立同盟を解くを得たり

一七八三年  
（徳川家治の  
乾隆の末）  
共和の憲法  
成る  
一七七年  
（徳川家齊の  
乾隆の末）

共和の憲法  
成る  
一七七年  
（徳川家齊の  
乾隆の末）

しも、陸軍は全く敗れ、遂に一七八三年ぱりー及びべるさいゆに和議を結び、殖民地十三州の獨立を承認せり。  
殖民地十三州は漸次統一の必要を認め、一七八七年ふらいてるふらいてるに會議を開き、自由平等論を基礎として憲法



獨立時代之  
合衆國  
一七五四年  
一七八三年

を定め、國體を合衆共和とし、大統領を置きて萬機を總べしめ、上下兩院に立法の權を委ね、各州は皆その自治に委ねぬ。之世界最初の大共和國 ウォシントンワシントン 舉げられて大統領となり、誠意政治に勵みしかば、あめりか合衆國これより漸く強くなりぬ。

#### 第四部 近世期

#### 第一篇 よーろっぱの大亂時代

#### 第一章 ふらんす革命

ルイス十四世以來文明の中心と誇稱したるふらんすは、内政の紊亂と外征の結果とによりて財政困難に陥れり。貴族教正は奢侈安逸を貪れども、下民は重斂に堪へずして生計に苦み、Voltaire ボルテール、Housan ルソー、Montesquieu モンテスキュー等が説ける民權自由平等の論を讀みて、これを夢想せるのみならず、あめりか合衆國の憲法を見て、これを羨み人心漸く穩ならず。

ルイス十六世は財政危急に陥れるを見、一七八九年國會

State: 1789-91

革命の原因

一 佛國王朝の暴政

二 貴族の横暴

三 土地領税の不均

四 官職の買収

五 革命の思想

六 共和主義の興起

七 共和主義の傳播

八 共和主義の實現

九 共和主義の完成

十 共和主義の普及

十一 共和主義の発展

十二 共和主義の成熟

十三 共和主義の繁榮

十四 共和主義の全盛

十五 共和主義の没落

十六 共和主義の衰微

十七 共和主義の消滅

十八 共和主義の復興

十九 共和主義の再興

二十 共和主義の永続

一七八九年  
光緒の朝  
政元年  
清隆乾の  
國會を開く

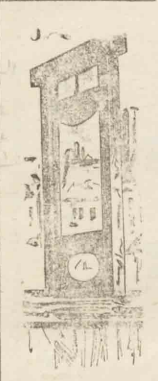
近世期 よーろっぱの大亂時代 ふらんす革命

をべるさいゆに召集し、公議によりて弊政を革めんとしき  
 平民は貴族教正の改革を妨害せんことを憤り、みづから國  
 民議會を開き、<sup>National Assembly</sup> ばりの暴民は蜂起して、<sup>Basile</sup> ばすらゆの牢獄  
 を破壊せり。  
 (國事犯の者入)

國民議會の行動  
 國民議會は恣に憲法を議定し、教正貴族の特權を全廢し、  
 國內を州郡に等分して自治制を行はしめ、王に迫りて之を  
 裁可せしめたり。

新憲法によりて召集せられたる立法議會は共和黨多數  
 を占めしかば、王は懼れて援をおしとりあに乞へり。こ  
 こに於て議會は兵を募りてこれに當り、王を幽閉して王權  
 を停止せり。

己にして國民會起り。一七九二  
 年九月二十二日王政を廢して共



臺頭斷

オーストリア王の  
 時に皇太后マリア  
 詩はより

王權停止

一七九二年

(徳川家齋の

乾隆の末)

國民會王を

殺す

*guillotine*  
*guillotine*

第一回大聯合

和政治とし、翌年王を斷頭臺上に弑せり。  
 いざりすの相<sup>Tit</sup>ピットはこの横暴を惡み、列國と聯合して革  
 命黨を討てり。ふらんす乃ち公安委員を置きて時局に當  
 らしむ。然るに公安委員は漫りに反對黨を殺戮し、キリス  
 ト教を全廢し狂暴殘虐到らざるなく、遂に公安委員互に相  
 殺戮し、社會の秩序安寧全く破壊せられたり。

ここに於て國民會の議員は禍の身に及ばんことを憂ひ、  
 過激黨の首領<sup>Robespierre</sup>ロベスピエールを銃殺し、公安委員を解散し  
 一七九五年理事政府を建てたり。

列國の聯合に對しては國民會は六十萬の壯丁を驅りて  
 之に當らしめ、列國の一致を缺くに乘じてねらんだを滅ぼ  
 せり。さればふろしあいすばにあは和を請ひて退き、いざ  
 りずとおしとりあとのみ、なほ戦を續くることとなりぬ

一七九五年

(寛政年間

乾隆末年)

ねらんだ

一七九三年六月  
 一七九四年七月  
 此の如き時代

近世期 よーつるばの大亂時代 ふらんす革命



大陸同盟の  
経畫  
ぶろしあ遠  
征

いべりあ半  
島  
征服

第四回お  
すとりあ遠  
征

此同盟は  
行せり  
と云ふ

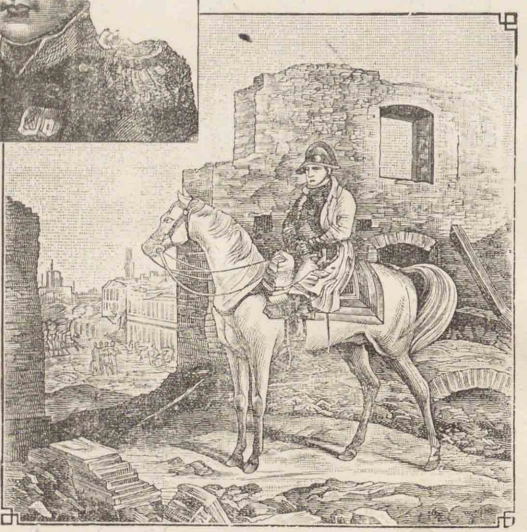
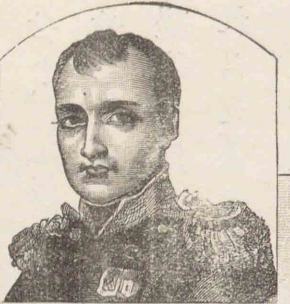
り。  
さればナポレオンは大陸同盟を起していざりすとの通  
商を絶ち、以ていざりすを苦しめんことを企て、まづぶろし  
あを討ちてえるべ左岸の地を割かしめ、ぶろしあろしあ兩  
國をして同盟に加入せしめたり。是に於ていざりすはい  
ざりす船の入港を拒む諸港を封鎖し、ナポレオン領に入る  
中立國の船舶を掠奪してこれに對抗せり。  
ナポレオンはぼるとがるのいざりすと通ずるを怒り、兵  
を遣はしてぼるとがる王をぶらじるに逐ひ、いすばにあを  
併呑し、更におーすとりあを降し、おーすとりあMarie Louiseの皇女マリ  
アルイザと婚し、盛に大陸同盟を厲行せり。

第三章 ナポレオンの衰亡 平和克復

ろしあ征討

一八二二年  
松平定信退  
職の年  
清仁宗の  
世

る於にはくすも  
世一ンオレボナ



かくナポレオンの勢威よーろつばを壓するに際し、ろしあ  
は大陸同盟の不利を認め、いざりすと交通を開きしかば、ナ  
ポレオン一世は一八  
一二年大舉してもす  
くばに入れり。然る  
にろしあ人は都府を  
焼きて退却せしかば、  
ふらんす軍據る所を  
失ひて困厄を極め、餓  
李凍餒陣營に充ち、ナ  
ポレオンは僅に身を  
以てぱりーに逃れ歸  
れり。

近世期 よーろつばの大亂時代 ナポレオンの衰亡

第四回大聯合

ナポレオンをえるばに流す

議  
一八一四年  
（徳川家齊の  
清仁宗の  
世）

ここに於て列國はまた大聯合を結びてふらんずを掩撃せり。ナポレオン一世は急に大軍を磨きてどいつに進撃せしに、らいふちひの大戦に敗れたり。されどなほ媾和の提議を斥けて、ひたすら恢復を志ししも、ばりー聯合軍に陥れられ、帝は遂に廢せられてゑるばに流されたり。列國ルイス十八世を立てて和を成せり。

列國は亂後の處置を議せんとし、一八一四年九月列國の帝王將相率ゐらういんに會し、翌年六月條約を締結せり。これによりおしずとりあはいたりあの舊領を復し、ふるしあはらえずとふりあ等を得、どいつは聯邦となりぬ。而してろしあはぽーらんど王國としてゐるしあわ公國の大部を得、ずらえーでんはのるらえーを併せ、いざりずはまるなを得たり。列國はまたおらんだとねーでるらんどを合せてねーでる

ナポレオンの再興

帝をせんとへれなに流す  
ルイス十八世の復位

らんど王國を組織し、ずらえいすばにあ及び法王領等の獨立を承認せり。

らういん會議の未だ終らざるにナポレオンは内外形勢の不穩なるを探知し、一八一五年三月ゑるばを逃れてぱりーに入り、再びふらんず皇帝と稱せり。列國はナポレオンを以て人類の公敵と認め、いざりずの將らえりんとんを總督とし、ナポレオンの軍をわいてるろーに破り、帝を護送してせんとへれなに流謫せり。ここに於て列國は再びぱりーに會し、ルイス十八世を復して和議を結び、十二月に至りて始めて事局を結べり。實に光格天皇享和二年にして清の嘉慶年間なり。

第二篇 保守專制時代

### 第一章 神聖同盟の成立

一八一五年ろしあ帝アレキサンデル一世はおーすと  
 あ及びふろしあ王と諮り、ぱりに神聖同盟を結び、同盟の  
 諸國は皆キリスト教を奉じ、内治外交ともに博愛主義によ  
 り互に相援助せんことを約せり。よーろば諸國は漸次こ  
 れに加入するに至りぬ。



ヒニルテツメ

おーすとりのあの相  
 は最も力を同盟に盡し、内には保  
 守専制を執り、外にはいたりあ  
 ずばにあぼるとがる等の自由主  
 義を鎮壓して偉大の勢力を振へ  
 り。

然るにいざりすはこの同盟に加入せず、各國の任意政治

神聖同盟の  
 締結後、諸國  
 由ておへんが  
 成る。

メツテルニ  
 ヒの専制主  
 義は、退歩し、  
 漸次自由主義  
 に向つて進歩  
 するものあり

あめりか殖  
 民獨立

米  
 帝  
 政  
 略  
 論

を唱へ、自由貿易論の實行を期せり。ぶらじるがぼるとが



一ロンモ領統大

るに叛し、ばらぐわい・べぬずえら  
 ぼりびあ・ちれめきしこ等がいす  
 ぼにあに反きて獨立を唱ふるに  
 及び、いざりすはこれに聲援して  
 その目的を達せしめ、貿易の利權  
 を獲たり。神聖同盟は殖民地を  
 鎮壓せんとせしも、あめりか合衆國大統領モンローのこれ  
 を許さざりしかば、遂に意を果すこと能はざりき。

### 第二章 神聖同盟の破綻 ざりしあの獨立

この頃ざりしあはキリスト教を奉じ、ろしあの後援を恃  
 みてとるこに叛き、獨立を唱ふ。とるこ帝はえじぶと藩王

モンロー主  
 義

ざりしあ獨  
 立を唱ふ

神聖同盟の  
 破綻後、諸國  
 由ておへんが  
 成る。



なばりのの  
海戦  
神聖同盟の  
破綻

に命じてこれを討ち、あてねを陥れたり。メッテルニヒはろしあに抗議してざりしあを援ふこと能はざらしむ。然るにニコライ一世位に即くに及び、遂にメッテルニヒの抗議を斥けていざりす。ふらんすと結び、一八二七年えじふとの艦隊をなばりのに破れり。神聖同盟はここに至りて破綻せり。

一八二九年  
徳川家齊の  
清道光  
年間

己にしていざりすはろしあがあどりあのおふるに迫るを見、深くこれを妬みしが、一八二九年あどりあのおふる條約によりて、ざりしあの獨立を承認して局を結び。一八三二年ハリアットの

破れけたり

### 第三篇 自由確立の時代

#### 第一章 七月革命とその影響

神聖同盟破綻してその壓力を自由主義に加ふる能はざ

る自由主義起

七月革命の  
原因  
一八三〇年  
天保元年  
家齊の世  
清道光  
年間

るに及び、革命忽ちふらんすに起り、自由主義は各國を風靡せり。

當時ふらんす王カロロ十世は大に貴族教正を庇護し、ボリニアクを相として王權神聖論を唱へ、一八三〇年議會を解散し、七月勅令を發布して未だ開會せざる議會をも解散し、選舉法を改め、言論出版の自由を控制せしかば、人民は大にその非政を憤り、亂を起して王軍を破り、チエール等の徒はおるれあん公ルイス・フイリポを迎へて王とせり。カロロ十世因りていざりすに逃る。これを七月革命といふ。

七月革命の餘波は忽ちねーでるらんどに及び、南部の人民は王の暴政を憤り、ぶるッセルに暴動を起して國をべるぎ一と稱せり。おらんだ軍これを討ちて勝たず。列國乃ちろんどんに會議を開き、べるぎ一の獨立を決議し、おらんだ

べるぎ一の  
獨立

革命成る

いべりあの  
立憲自由  
いざりすの  
改革

ぼーらんと  
の壓抑

をしてこれを承認せしめたり。

いずばにあぼるとがるにも亦暴動起り、皆立憲自由を得るに至れり。いざりすのウエリントン内閣も遂に輿論に抗する能はずして、舊教徒に官吏、議員たるの權を與へ、グレイ内閣は議院法を改正して新興の都市に被選權を與へ、奴隷所有者に補償して奴隷を廢止し、益、自由主義を振張せり。

ぼーらんとも獨立自由を唱へて立ちしが、戰全く破れ、王國は廢せられてろしあの直轄領となりぬ。

### 第二章 二月革命とその影響

七月革命の成功せしは全く労働者の効に屬せしかば、労働者はその報酬として選舉權擴張と職工保護とを政府に迫まれり。然るに一八四八年ギゾー内閣はこれを聞かず、

二月革命  
一八四八年  
孝明嘉永元  
年  
清道光の  
末國

ふらんす共  
和國となる

ホンカリヤモ  
フストは  
リヤ

却てその運動を制止せしかば、暴民また忽ちばりーに起り、王軍を破りて王及び王太孫をいざりすに走らしめ、假政府を建てたり。これを二月革命といふ。

假政府は選舉法を定め、國民議會を開き、ふらんすの共和政治たるを宣言し、全くばりーの暴動を鎮壓せり。

二月革命の餘波はどいつに及び、おーすとりにあには學生市民蜂起してメッテルニヒをいざりすに走らし、ふるしとには人民、王に迫りて、ともに憲法を享有するを得たりき。

## 第四篇 統一成功の時代

### 第一章 ナポレオン三世 くりむ戦争

一八四八年ふらんすに國會議員の選舉あるに乗じ、ナポレオン一世の甥ルイス・ナポレオンは選ばれて國會議員と

ルイス・ナ  
ポレオン大  
統領となる

なり、遂に大統領に推薦せられたり。

ナポレオンは地方人民を慰撫して憲法改正を請願せしめ、一八五一年兵力によりて國會を解散し、新憲法を公にして遂に十年の大統領となり、翌年帝位に即きぬ。これをナポレオン三世とす。



(幣貨) 世三ンオレボナ

この頃ろしあは切りにとるこに勢力を張らんとし、とるこがふらんすにいえるされむ殿堂建築を許せるを見、とるこに迫りてぎりしあ教徒の保護を要求し、遂に軍艦を派してとるこの海軍を破れり。時々露皇帝ニコライ一世

ナポレオン三世はいざりすと同盟してとるこを援助し、聯合艦隊を以てくりむ半島に迫り、更にさるぢにあの援を得て、海陸せばすとぼるの砲臺を陥れ、一八五五年三月くり

戦況 ナンカール行 せばすとぼる 陥る

帝位に即く 一八五一年 孝明嘉永三 清長慶永三 亂の頃 佛國を一時にせんし 佛國を一時にせんし

此は英目のみナポレオン三世の肖像を以てし 後赤十字成り

む總督ゴルチアコフを撃退せり。ここに於て列國はばりーに會議を開き、ろしあをしてせばすとぼるの武備を撤去せしめてくりむを還附し、とるこをしてイスラム及キリスト兩教徒の平等權利を承認せしめ、同時に戦時に於て中立國の權利を確保すべき中立條規を宣言せり。

第二章 いたりあの統一

さるぢにあ王ビクトリオエマヌエロ二世はさきにカブール伯の議を納れてくりむ戦争にいざりす。ふらんすの同盟を援助せしが、今やその報酬としてふらんすに援を乞ひ、以ていたりあ統一の大業を企てたり。



ル - プカ

一八五五年 孝明安政二 年家定の世 長髮誠の世 ばりー條約

さるぢにあの經畫

そのふえりの戦  
一八五九年  
（孝明天皇の  
天津條約の  
翌年）

ちうーりひ  
會議

諸州の來附

しちりあの  
合併

いたりあ  
國起る

おーすとりあはいたりあの形勢不穩なるを見、兵をいた  
りあに出せしかば、ふらんすさるぢにあの同盟軍は一八五  
九年おーすとりあ軍をそるふえりのに破れり。

ナポレオン三世はこの奇勝に乘じ、おーすとりあ帝と會  
してろむばるぢあを割讓せしめ、更にちうーりひに於て和約  
を確定し、これをさるぢにあに與へたり。

ここに於ていたりあ諸邦は陸續としてさるぢにあに合  
併し、さるぢにあはさぼや等をふらんすに譲りてその承認  
を得たり。時にいたりあ人ガリバルヂ義勇兵を率ゐて、し

ちりあなほりを降し、悉く侵地を獻じてさるぢにあに歸順  
せり。

さればビクトリオエマヌエロ二世は一八六一年いたり  
あ王と稱し、ふれんつえに都せり。いたりあの領たらざるも

一八六一年  
（孝明文久元  
年の翌年）

奴隷論起る

北部工業

南部農業

南部獨立を  
唱ふ

一八六〇年  
（孝明萬延元  
年北條條約  
成立の年）

戦況  
一八六三年  
（長州赤門關  
砲撃の年）  
（長門赤門關  
砲撃の年）  
（長門赤門關  
砲撃の年）

の今や半島にろーまとべねちああるのみ。

### 第三章 あめりか合衆國

合衆國は獨立以來漸く繁榮に赴き領土も益擴がりしが、  
元來南部諸州は奴隷を使役して棉花を栽培せしに、北部は  
商工を營みて奴隷の必要なきを唱へ、奴隷使役を以て天理  
に戻るものなりと論じ、一八四八年かりふおるにあの金礦  
發見せられてより、この論争益烈しかりき。

一八六〇年リンカーンが奴隷廢止論を以て大統領たる  
に及び、南部十一州は大に激昂し、遂にあめりか聯邦を建て  
ダビスを大統領となせり。

ここに於て戦争起り、南軍屢北軍を破りしが、一八六三年  
リンカーンが奴隷解放令を發布してより北軍頓に振ひ、北

南北の合一

軍の將グラントはリッチモンドを陥れ、あめりか聯邦を解散し南北また合一せり。

### 第四章 どれいつの統一

ぶろしあ  
の  
經  
畫

でんまるく  
より二州を  
取る



クルマスビ

どれいつは已に久しく統一の必要を認めて未だ解決に至らざりしに、ぶろしあ王ウイレルム一世はビスマルクを任用してその目的を達せんことを期せり。これより先きでんまるくは王位相續の問題により久しくどれいつ聯邦と紛議を重ねしかば、ビスマルクは聯邦とともにしうれすうひほるすたいん二州のでんまるくに合併すべからざるを論じ、兵を出して二州を占

二州の争奪

戦因

さどばの戦  
一八六六年  
孝明慶應元  
年  
清同治年

おすとり  
あ  
す  
一八六七年  
孝明慶應二  
年  
清同治年

領し、これをどれいつに割譲せしめたり。

ビスマルクはおすとりあと議し、二州を分領すべきを約せり。然るに、二州はその分領せらるゝを欲せざりしかば、ビスマルクはこれを以ておすとりあの教唆に因ると稱しておすとりあを難詰し、いなりあとの攻守同盟成るに乗じ、遂にどれいつ改造の必要を論じて兵を動かせり。

一八六六年ウイレルム一世はモルトケを伴ひおすとりあ軍をさどばに破り、いなりあ軍また漸く北進せしかば、おすとりあは一八六七年ナポレオン三世の盡力によりて和を乞ひぬ。ここに於ておすとりあはふらいぐの和約により除外せられ、ぶろしあのみいん河北に北どれいつ聯邦を組織するを承認し、うーん條約によりいなりあにべぬちあを割譲せり。

ナポレオン三世の不平

戦因

戦況

ドイツ帝國  
成る

ここに於てナポレオン三世は斡旋の報酬としてらいん地方を望みてビスマルクに拒まれ、ルクセンブルグをおらんだより購はんとしてまたビスマルクに妨げられ、心平ならず。會いずばはあ女王イサベラ廢せられ、ふろしあ王の一族レオポルドのいずばはあに迎へられたるを聞き、ふろしあ王に之を禁じ、且つ將來これに與らざるべきを保證せんことを要めしに、速にその拒絶する所となりしかば、ふらんすこれを憤りて戦を宣言せり。

然るに戦闘は全くふらんすの敗に歸し、ナポレオン三世はせだんに虜にせられ、めつつ陥り、ばりーは圍まれぬ。時、獨逸の將モルトケここに於て全ドイツの王侯相議りてドイツ帝國の建設を宣言し、ウिल्ヘルム一世はふらんすの舊王宮に即位式を擧げたり。ドイツ統一の大業ここに於て成れり。

いたりあの一完成す

條約  
一八七一年  
明治四年日清條約成る

ふらんす共和國となす  
一八七五年  
光緒元年

とるこの非政

いたりあもこの機に乗じ法王領を奪ひて統一の業を成就し、都をろーまに奠めたり。

ふらんすは力竭きて和を乞ひ、一八七一年チエールはべるさいゆにビスマルクと會し、えるさすろーとりんげんの二州をどいつに譲り、五十億フランの償金を約せり。

チエール銳意治を圖り償金を皆濟し、一八七五年マクマホン共和憲法を制定し、選ばれて大統領となりぬ。

### 第五篇 最近の形勢

#### 第一章 ろしあをとることの役

##### 三國同盟・二國聯合

ふろしあとふらんすとの戦争後、ふらんすは常にどいつを嫉みしかば、ろしあはこの機に乗じ、東よーろっばに利を占



信教自由を公約せり。加之、とるこはろしあにかるすばつ  
むを譲り、おーすとりにほすにあへるせごびなを與へ、  
ざりしあにはて、ざりあを割き、いざりすにはきふるすを領  
有せしめたり。  
Thessaly  
Hisulia  
Cyprus

三國同盟  
一八八三年  
（明治十六年）  
光緒九年  
一八九五年  
（明治二十八年）  
馬關條約の年

二國聯合  
虛無黨  
社會黨

ろしあはビスマルクがべるりん會議にろしあの利益を  
重ぜざりしを怒りしかば、ビスマルクはおーすとりにあいた  
りあを招きて、一八八三年三國間に防禦同盟を結びてこれ  
に備へき。ろしあはこれを見、一八九五年に至りふらんず  
と強固なる二國聯合を結びてこれに對せり。

この頃ろしあには虚無黨起りて社會の秩序を破壊せん  
ことを圖り、秘密手段によりて貴紳を暗殺し、アレキサンデ  
ル二世を殺すに至れり。どいついなりあには社會黨横行  
して屢帝王に危害を加へんとしき。

第二章 最近の文明

文學

西洋の文化は第十八世紀末より長足の進歩を爲せり。  
文學は實際を寫すの妙を究め、ふらんずのユーゴー、いざり  
すのテニソン、どいつのシルレル、ゲーテ等文豪を以て稱せ  
らる。  
Tenyson  
Schiller  
Goethe  
Hanke

哲學

哲學はどいつ人カント認識論を説き、ついでヘーゲル、ス  
ペンサー等益幽遠の哲理を説けり。科學にはどいつ人マ  
イエル勢力不滅説を唱へ、いざりす人ダーウィン進化論を説  
けり。また顯微鏡望遠鏡寫眞術等の發明は天文・生物・化學

科學

醫學をして著しく進歩せしめたり。

發明

科學の發達に伴ひてその應用また精妙に至り、合衆國人  
ファルトンは汽船を創製し、いざりす人ステブソンは一八

（一八二二年）  
（光緒文化九）  
（一八三二年）  
（仁孝天保四）



汽船及び汽車の發明

電信・電話  
其他の發明

兵器の進歩

共同博愛

赤十字社  
はゞ會議

一二年汽車を創造せり。また一八三三年といつ人ガウス  
電氣を利用して電信を發明し、一八七七年には合衆國人グ  
ラハムベル電話を改修せり。その他電車・電燈・無線電信等  
有益なる發明枚舉に違あらず。

兵器戰術の進歩また大に見るべきものあり、後裝連發銃・  
速射砲、有力なる火藥、堅牢なる甲鐵艦、水雷等その最著しき  
ものなり。而して空中飛行船の發明も亦將に完全ならん  
とす。

國際上の關係益複雑なるに及び、共同博愛の事業盛に起  
り、萬國博覽會は屢開設せられ、郵便・電信・商標・版權の同盟ま  
た起れり。衛生學術の諸會議も開かれ、慈惠病院・養育院等  
諸國に設けられたり。殊にじぬぶの列國會議の決議に  
よりて一八六四年赤十字社成立し、一八九九年にははゞ

Hague

一八六四年  
(孝明元治元  
年) 清同治年

製造貿易の  
増進發達

あふりか洲

の萬國平和會議により戰時海員の救助並に仲裁々判所開  
設を決議實行するに至れり。

科學の發達は農牧・山林・水産の事業も發展せしめ、蒸汽機  
關の利用は製造工業の隆運を見るに至りぬ。加之電信電  
話の發明、汽車・汽船の利用は商業の便利と安全とを致し、海  
上保險の發達、信用取引の進歩、貨幣制度の確立は益貿易の  
増進を促せり。殊にきーるすえず兩運河の開鑿、あめりか  
かなだしへりあ大鐵道の完成は益世界貿易の隆運を致さ  
しむ。列國は分業の主義により各殖産を盛にし有無相通  
じて競争場裏に雄勢の位置を得んことを期せり。

### 第三章 西洋諸國の勢力擴張

よーろっば諸國は由來あふりか洲の探檢殖民に注目し、競

ふらんすの勢力  
いざりすの勢力

ひてその開拓に従事せり。ふらんすはあるぜりあ、ちうじしあを征服し、まだがすかるを保護となしぬ。いざりすはすえず運河の株券を買収してえじふとに勢力を張り、またけ  
Suez  
一ふ殖民地より北進して南あふりか共和国に侵入し、採金の利を占めて遂にこれを征服せり。  
Cape Colony

大平洋方面にありてはいざりす人クックおーすとらりあ及び  
New Zealand  
一にじーらんどを精査してこれに殖民し、一九〇一年殖民地には遂に聯合憲法を發布せり。

あめりか合衆國ははわいを合併し、さうば島民のいすばにあに叛くに及び、これを援けて戦を交へ、一八九八年即ち明治三十一年に至り、いすばにあよりふいりびん群島及び  
Philippine  
るとりこを得、さうばを獨立せしめたり。

更にあじあ方面を見るに、いざりすは己にいんど及びば

おーすとらりあ  
(明治三十四年)  
あめりか合衆國  
はわい及びふいりびん  
あじあ洲

いんど帝國

香港

いんどしな

しべりあ

馬關條約に對する三國交渉

三國の報酬獲得

義和團事件

るまを征服していんど帝國を建て、中央あじあにはろしあ  
と角逐してその利權を保持し、清國とは鴉片戦争によりて  
香港の割讓を得、南清に商利を占めんことをつとめたり。  
ふらんすもいんどしなに注目し清國との戦により安南に  
利權を得たり。ろしあもまた漸次北方に領土を開きて烏  
蘇里右岸の地を得たり。

日本が清と戦を交へ、明治二十八年馬關條約を締結する  
に及び、ろしあは極東經營上日本の遼東を得るを憂ひ、どい  
つふらんすを誘ひ、わが國に迫りて滿洲を還附せしめたり。  
これよりどいつは膠洲灣を、ろしあは旅順口・大連灣を強借  
し、ふらんすは南清に利を得、いざりすは均勢上、威海衛を租  
借せり。

されば清國民は憤起し、義和團は興清滅洋を唱へて暴動

ろしあ  
の満洲  
占領

を起し各國公使館を危うしてどいつ公使を殺害せり。列國は兵を出して北京を陥れ、ろしあは特に滿洲を占領せり。一九〇一年即ち明治三十四年九月議定書成り、列國は償金を清國に徴するを約し、兵を撤せしも、ろしあは言を左右に托して容易に滿洲より撤兵せざりき。

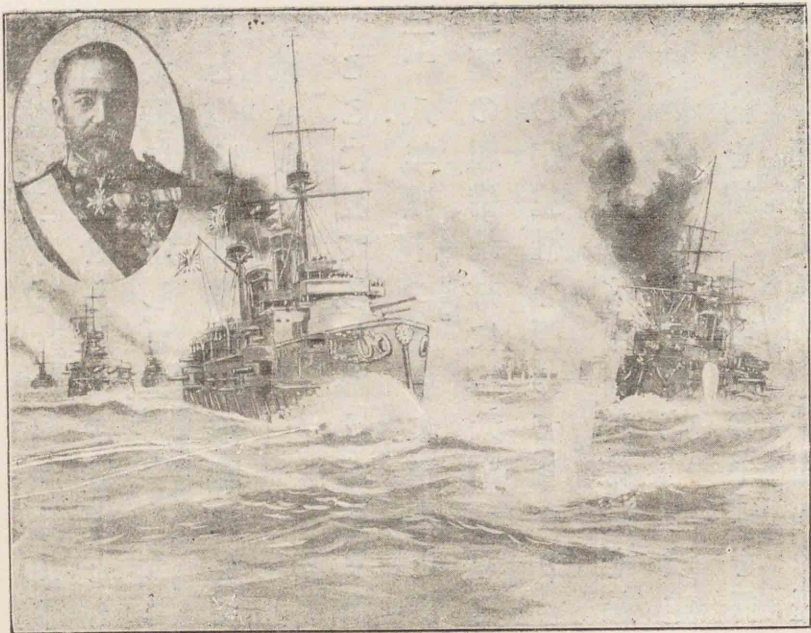
#### 第四章 明治三十七八年の戦役

日本といざ  
りすの同盟

戦闘

ろしあが滿洲を撤兵せず、東洋の形勢危きに及び、いじりずは清國の利を惟ひ、明治三十五年清韓の利を重ぜる日本と東洋に於ける攻守同盟を結べり。然るにろしあはしべり、大鐵道を敷設し、また陸路旅順口及びウラチボとくの交通を開くに及び、海路その連絡を通せんことを期せり。されば韓國には種々の要求を提

戦況



出してこれを苦しめ、清國には蒙古滿洲に於ける利益を強請して、滿洲の兵を撤せず、日本が東洋の平和を慮り、誠意協商を遂げんとするも、その解答を遷延し、遂に明治三十七年二月日本をして決然起ちて砲火を交へしむるに至りぬ。旅順口のろしあ東洋艦隊は日本の海軍に破られ、港内に屏息して多

く損傷を受け、クロバトキンの陸軍は連戦皆敗れて退き、旅順口は包圍せられて海陸軍ともに全滅し、本軍は沙河奉天の大戦に潰走し、ロジェストウェンスキーの新に率うるばると艦隊は日本海、海戦に於て東郷平八郎の爲めに殆ど全滅せられたり。

ばいつます  
會議

ここに於てろしあはあめりか合衆國の提議に従ひ、明治三十八年、Porsmouthばいつますに日本と媾和の會議を開き、旅順口、大連灣の租借地并に樺太南半を日本に譲り、且韓國に對する日本の宗主權を認めて和せり。

結果

日本はこれより日韓條約を結びて漸く韓國保護の實を擧げ、いぎりすと同盟條約を改定し、ろしあ、ふらんす、合衆國と協約を結びて東洋の平和を保護し、國光益々四方に發揚せり。而してろしあは國內紛擾の結果、ろしあ皇帝は祖宗

いぎりすと  
西藏の條約  
のるうえー  
獨立

の法を改めて憲法を發布し、漸次國力の恢復につとめたり。いぎりすはこの戦役の際、西藏に遠征し、條約を結びて西藏がろしあに併吞せらるるの憂を絶ちたり。のるうえーはこの戦役の間にすらえーでんより獨立して王國となりぬ。

### 最新西洋史追補

わが韓國保護の成績は大に見るべきものありしと雖も、なほ未だ治安の保持を完するに足らざるものありしかば、明治四十三年八月二十二日條約を結びて韓國を併合し、韓の號を改めて朝鮮と稱し、皇帝を冊して王とし、特に皇帝の禮を以てせり。是に於て帝國の福祉は益増進し、東洋永遠の平和愈確保せらるゝに至れり。

### 最新西洋史終

### 年表

西曆	皇	曆	清曆	事	蹟
紀元前 凡二七〇〇年					
七五三					
七七六					
七五三					
六〇六	五 神	武 五	東周定王 元	あつしりあ滅ぶ	
四八〇	一八 懿	德 三	東周敬王 四	さらみすの戦	
三三三	三六 孝	安 七	東周顯王 四	アレクサンドル大王歿す	
二六四	三九 孝	靈 七	東周赧王 五	第一ぼろに戦役起る	
二八	四三 孝	靈 七	秦 始 皇 四	ハンニバルろーまに進入す	
一四六	五五 開	化 三	漢景帝中元 四	かるたご亡ぶ	
一三三	五八 開	化 五	漢武帝元光 二	ろーま外國征討の功を奏す	
四	六七 崇	神 五	漢元帝初元 五	ケーサル殺さる	

年表

二七	六四	垂仁	漢成帝河平二	オクタビアヌス帝號を稱す
三三	九三	仁德	晋明帝太寧元	コンスタンチヌス帝即位
四六	二二	雄略	宋廢帝元徽四	西ろ一ま滅ぶ
五七	二七	繼體	梁武帝大通元	ユスチニアヌス帝即位
六三	二二	推古	唐高祖武徳五	ムハメツドの逃走
八〇	四〇	桓武延暦元	唐徳宗貞元六	カロロ大帝即位
八六	四六	淳和天長三	唐敬宗寶曆二	ルーリックろしあの基を開く
八七	四七	淳和天長四	唐文宗太和元	エクベルトいざりすの基を開く
八七	五七	光孝仁和三	唐憲宗光啓三	アルヌルフどいつを建つ
九二	六三	村上應和二	宋太祖即位三	オトどいつ帝國を立つ
一〇〇	七〇	後冷泉治暦二	宋英宗治平三	ウイルレムいざりすを征服す
一〇七	七七	白河承暦元	宋神宗熙寧二	法王グレゴリオ七世皇帝ヘンリ四世を謝罪せしむ
一〇六	七六	堀河永長二	宋哲宗紹聖三	第一十字軍起る
一一五	八五	順徳建保三	宋寧宗嘉定八	いざりす憲法を定む
一二〇	九〇	花園延慶二	元武宗至大二	フランス王法王をあびにおんに移す

一四三	二二	後花園享徳二	明景帝景泰四	東ろ一ま帝國亡ぶ
一四六	二四	後土御門文明元	明憲宗成化三	喜望峰發見す
一四九	二五	後土御門明應元	明孝宗弘治五	コロンブスあめりかを發見す
一五七	二七	後柏原永正二	明武宗正徳三	ルーテル宗教改革論を唱ふ
一五二	二二	後柏原大永元	明武宗正徳六	世界一週の功成る
一五九	二八	後奈良享祿三	明世宗嘉靖八	新教起る
一五〇	三〇	後奈良天文九	明世宗嘉靖一九	イエスイタ教社成る
一五五	三五	後奈良弘治元	明世宗嘉靖三二	あうどすぶるどの宗教構和
一五八	三二	正親町天正九	明神宗萬曆九	ねらん松獨立を唱ふ
一五八	三二	後陽成天正二六	明神宗萬曆二六	いざりす、いすばにあの艦隊を破る
一六八	三七	後水尾元和四	明神宗萬曆四四	三十年戦争起る
一六八	三八	後光明慶安元	明永明王永曆二	うえすとふありあの構和
一六九	三九	後光明慶安二	明永明王永曆三	いざりす王カロロ一世弑せらる
一六二	四二	後光明慶安四	明永明王永曆五	クロンウエル航海條例を發布す
一六八	四八	東山元祿元	清聖祖康熙二七	いざり 革命成る

一七〇一	二二六二	東山元祿	一四	清聖祖康熙	四〇	いすばにあ王位相續の亂起る
一七二三	二二七三	中御門正徳	三	清聖祖康熙	五	ゆとれひとの媾和
一七二二	二二八一	中御門享保	六	清高宗乾隆	六〇	にすたつとの媾和
一七四〇	二四〇〇	櫻町元文	五	清高宗乾隆	五	マリアテレサ即位
一七四八	二四〇八	桃園寛延	元	清高宗乾隆	三	あーへん條約
一七五六	二四一六	桃園寶曆	六	清高宗乾隆	二	七年戦争起る
一七六三	二四二三	後櫻町寶曆	三	清高宗乾隆	二六	ぼりー條約成る
一七七一	二四三三	後桃園安永	元	清高宗乾隆	三七	ぼーらんど第一分割
一七八三	二四四三	光格天明	三	清高宗乾隆	四	あめりか殖民地獨立す
一七八九	二四四九	光格寛政	元	清高宗乾隆	四	ふらんす革命起る
一七九二	二四五二	光格寛政	四	清高宗乾隆	五	ふらんす共和国となる
一七九三	二四五三	光格寛政	五	清高宗乾隆	五	ふらんす王ルイス十六世殺さる
一七九五	二四五五	光格寛政	七	清高宗乾隆	六	ふらんす第二分割
一八〇四	二四六四	光格文化	元	清仁宗嘉慶	九	ふらんす理政府を立つ
一八〇五	二四六五	光格文化	二	清仁宗嘉慶	一〇	ぼーらんど第三分割

一八〇六	二四六六	光格文化	三	清仁宗嘉慶	二	神聖ろーま帝國亡ぶ
一八二二	二四七二	光格文化	九	清仁宗嘉慶	七	ナポレオンろしあを征して大敗す
一八二四	二四七四	光格文化	二	清仁宗嘉慶	九	瀛事發明
一八二五	二四七五	光格文化	三	清仁宗嘉慶	一〇	ナポレオンろるばに流さる
一八二九	二四八九	仁孝文政	三	清宣宗道光	九	ういーん條約成る
一八三〇	二四九〇	仁孝天保	元	清宣宗道光	一〇	あどりあのぶる條約
一八四二	二五〇二	仁孝天保	三	清宣宗道光	三	ざりしあ獨立す
一八四八	二五〇八	孝明嘉永	元	清宣宗道光	二	七月革命
一八五六	二五二六	孝明安政	二	清文宗咸豐	五	南京條約
一八五八	二五二八	孝明安政	五	清文宗咸豐	八	二月革命
一八五九	二五二九	孝明安政	六	清文宗咸豐	九	ぼりー條約成る
一八六三	二五三三	孝明文久	三	清穆宗同治	二	くりむ戦争終る
一八六七	二五三七	孝明慶應	二	清穆宗同治	六	天津條約
一八七〇	二五四〇	明治	三	清穆宗同治	九	ちうーりひ條約
一八七二	二五四二	明治	四	清穆宗同治	一〇	あめりか合衆國奴隸を解放す
一八七三	二五四三	明治	五	清穆宗同治	一〇	ふらーど條約成る
一八七四	二五四四	明治	六	清穆宗同治	一〇	ふらんすとぶろしあとの戦起る
一八七五	二五四五	明治	七	清穆宗同治	一〇	赤十字社同盟成る
一八七六	二五四六	明治	八	清穆宗同治	一〇	べるさい條約成る
一八七七	二五四七	明治	九	清穆宗同治	一〇	どいつ帝國成る

一八七五	二五五	明治	治八	清光緒元	ふらんす共和制度成る
一八七六	二五七	明治	治二〇	清光緒三	ろしあどとるこの戦起る 電話發明
一八八三	二五八	明治	治二六	清光緒四	べるりん條約 虚無黨起る
一八八五	二五九	明治	治三六	清光緒九	三國同盟成る
一八九五	二六〇	明治	治四六	清光緒二	ふらんす安南問題につき平々
一八九六	二六一	明治	治五三	清光緒二	馬關條約 三國の干渉 二國聯合成る
一八九九	二六二	明治	治五九	清光緒二	あめりか合衆國いすばにあと戦ふ
一九〇一	二六三	明治	治六三	清光緒二	ばーどの平和會議
一九〇二	二六四	明治	治六八	清光緒二	北京議定書成る
一九〇四	二六五	明治	治七三	清光緒二	いざりす日本と同盟す
一九〇五	二六六	明治	治七八	清光緒二	ろしあ日本と戦を開く
					日本海々戦 ばーつます條約成る

明治四十年三月四日印刷  
 明治四十年三月八日發行  
 明治四十年九月六日訂正再版印刷  
 明治四十年九月十一日訂正再版發行  
 明治四十二年十二月廿九日訂正三版印刷  
 明治四十二年十二月廿九日訂正三版發行  
 明治四十三年一月二日訂正三版發行

最新 西洋史  
 定價金五拾五錢



著者 小川 銀次郎  
 發行兼印刷者 合資 六 盟 館  
 右代表者 杉本 七百丸

發行所

東京市日本橋區鐵砲町三番地  
 合資 六 盟 館  
 (電話) 浪花二七六四番  
 (振替口座東京) 二二五五〇番



合資  
會社  
六盟館  
出版圖書  
大販賣所

東京市京橋區  
南傳馬町二丁目

東京市日本橋區  
鐵砲町

東京市日本橋區  
本石町二丁目

長野市櫻枝町

長岡市表四ノ丁

目黒甚七

電話本局二一六三番  
振替貯金口座二八〇九番

榊原友吉

電話浪花三三二二番  
振替貯金口座三〇九〇番

杉本七百丸

電話本局一六九八番  
振替貯金口座五六二二番

西澤喜太郎

目黒十郎





0  
02

広島大学図書  
2000089902  
